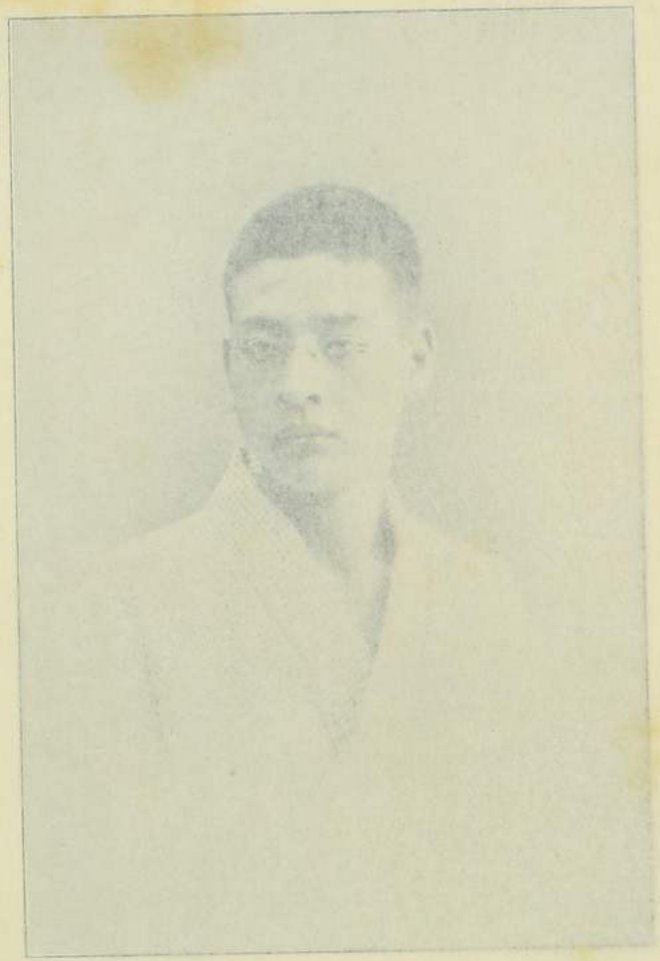
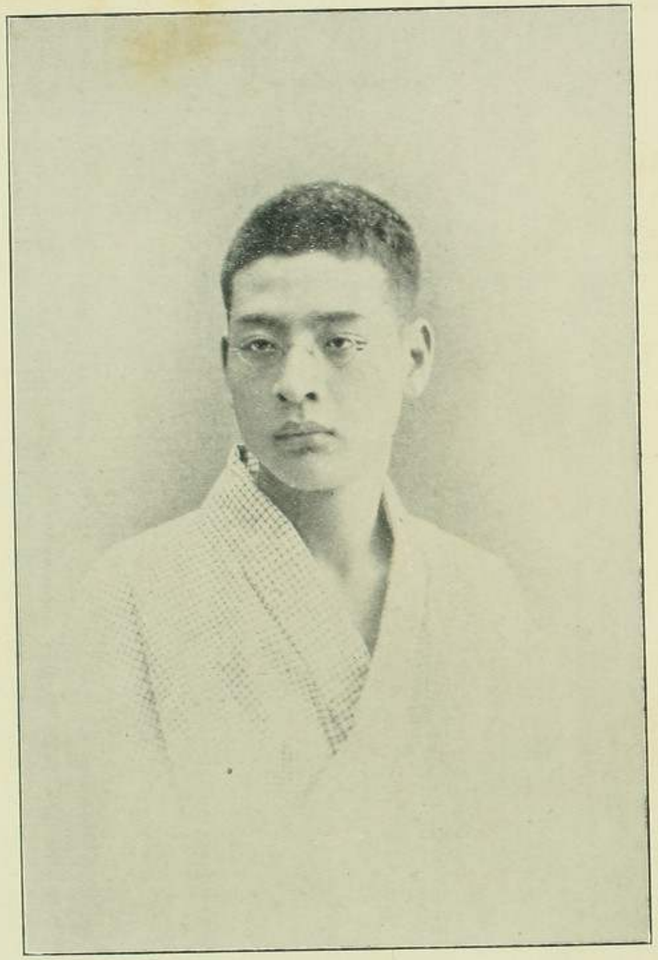
古公遺稿





小川一眞寫眞彫刻銅版及印刷

古白遺稿

目錄

一俳句……一頁
新年
春
夏
秋
冬
雜
一和歌……二五
一情鬼……二六
一人柱築島由來……三六
一藤野潔の傳……一五六

一遺稿跋並追弔詩文……一八二

古白遺稿

俳句

○新年

歳旦　鶴に乘る願ひは無くて今朝の春

元日や夜に入りしより女聲

今朝四方の海から明けて不二の山

元日霞ふりければ

楪葉にこは年玉の霞かな

初日　初日影夜は明けていまだ富士見にず

初日影五尺の庵に入れ申す

初夢　初夢や富士飛び越えて花に月

松飾　山社松の木の間の松飾

吉野路や冬の櫻に松飾

傀儡師　傀儡師日暮れて歸る羅生門

衣更着　○春

長閑　きさらぎや若草山に晝の月

のどかさや五器に飯ある乞食小屋

のどかさは泥の中行く清水かな

日永　永き日の洛陽に入りて暮れにけり

春夜　春の夜や衣桁を辷る衣そよろ

春の夜や灯をつけて居る清見寺

子規子發足の前夜其儀居を訪ふ

春の夜や諸越へ行く旅支度

子日　君が代や大根畠に子の日せん

天竺や小松引く野の佛だち

山燒　山燒くや窓でながめて庭へ出て

畑打　畑打や柳の奥に村一つ

凧　切れ凧に淋しく暮るゝ廣野かな

爐塞　爐塞や坐つて見たり寐て見たり

雛　松風も村雨もあり須磨の雛

海苔　新海苔や誰が袖が浦紺ちゝぶ

ぬつと出る海苔干す露路の白帆かな

雪解　鹽濱に清水流るゝ雪解かな

雪間　杉暗き社の雪間〳〵かな

春雨　春雨や京は町並琴の聲

春雨や石の濡れたる金閣寺

近江路やしがらき笠に春の雨

清水に月無き夜なり春の雨

不老門に日の暮るゝなり春の雨

春風　小式部の衣紋くづすや春の風

春風や橋を渡れば嵐山

朧月

野の雪や空照り返す朧月

山の灯は京のうしろや朧月

灯のともるやうに出るなり春の月

鶯のねくら探さん春の月

大佛に落ちかゝりけり朧月

諸越の使者來る夜なり朧月

富士見えていよ〳〵朧月夜かな

陽炎

上げ汐の千住迄來て朧月

陽炎やさく〳〵と踏む砂の上

陽炎に馬のくさめをふきかけぬ

霞

山を出て山を見返る霞かな

別霜

山鳥の跡や尾上の別れ霜

春海

舟歌に月こそ出づれ春の海

春の海船頭起きて眞帆あがる

春水

春の水や草鞋の流れ行く末は

草ちよぼ〳〵泥に澄みけり春の水

簪で饅釣るべし春の水

水門を出て濁りけり春の水

戀猫

戀猫のあらはれ出たる戸棚かな

啼きやめて糞したりけり猫の戀

鹿落角

鹿の角月にうつして落しけり

落したで言譯立つや鹿の角

呼子鳥

奥山や鈴がら振つて呼子鳥

鶯

井のほとり鶯のちよこ〳〵走りけり

鶯や海に日の出る山の裏

鶯や歌の中山清閑寺

鶯や若菜洗ひし井戸の端

鶯や廣野あたりの夕霞

鶯や梅の根岸のぬかり道
鶯や畫迄鎖す柴の門
鶯や納屋の板戸にかゝる雨
鶯や松の初音を大悲閣
鶯の千里を牛の歩みかな

雲雀　鳴くや雲雀五山の空に只一つ
燕　燕やぬれ足並ぶ橋の上
歸雁　歸る雁沖白う夜は風寒し
雉　二、聲は同じ雉なり草の中
蝶　夢中にて

蚊　傘の蝶にうかるゝ女かな
蛙　飴賣の蚊に追はるゝ野路かな
蠶　いろ〳〵に田の月動く蛙かな
手すさびに桑摘む姫や紙蠶

蛤　子を負ふて蛤にぢる淺瀨かな
梅　白梅やその曉の星寒し
鶯の糞程梅の咲きにけり
梅咲いて彫物古し山社
三日月は梅一輪の闇にして
無得に寄す
梅咲くや門を開いて徒に授く

送　別
梅が散る唯立ちのきて別れかな
舟呼ぶや柳から出る海人の妻
簾捲けば則ち青き柳かな

柳　青柳や狐釣るべき枝の形
有明に緋鯉釣るべき柳かな
水程はさわがぬ雨の柳かな

桃　雛四五軒垣つゝきなり桃の花

櫻　花を折つてふり返つて曰くあれは白雲

花守の散る時は寐てしまひけり

一寸の錦織るなり花盛

花盛満月も散るばかりなり

見覺にん月も無き夜の花の宿

夕櫻月出でゝいまだ夜ならず

靜かさや雨に暮れ行く山櫻

泥舟の泥に散りたる櫻かな

山門の奥に寺無し初櫻

散る時は一重なりけり八重櫻

若葉　水の上に餘りかもたし八重櫻

鶺鴒や渡守る家の七若菜

若草　若草や背戸よりつゝく山一つ

菊根分　若草や寐よげに見ゆる野邊の月

蕨　白菊と札の付いたる根分かな

市中の日にしほれたる蕨かな

菜花　菜の花や末寺の見ゆる麓迄

山吹　山吹の濡れてひつゝく折戸かな

○夏

短夜　短夜の出來事なりし升落し

涼し　出汐の浪走り行く月涼し

秋近　風は草を分けて野中の清水秋近し

蚊遣　運慶が鬼の皮たく蚊遣かな

夏袴　夏袴見臺の書は書か禮か

虫干　虫干や千疊敷を大般若

納涼　大阪二句

涼みとは橋の名所か水の上

五月雨　橋涼みこゝにも金の咄かな
　　濁り江のあやめに澄みぬ五月雨

風薫　即景

　　風薫る桐の葉虫がくゝふて居る
雲の峰　大阪や烟突に立つ雲の峰
夏月　山僧の米搗く窓や夏の月
夕立　夕立や笠の上行く峰の雲
　　夕立の沖には裸船頭かな
時鳥　時鳥すわやよせ來る磯の波
　　時鳥一聲に月落ちにけり
閑子鳥　閑子鳥巣くへ我庵檜朽ちぬ
水雞　捨舟の干潟に敲く水雞かな
螢　野邊の露毛が生にて飛ぶ螢かな
蚊　蚊柱や蚊柱や三十三間堂

蟬　蟬鳴くや梢に煙る淺間山
蚤　旅人の晝寐のあとや草の蚤
蝸牛　蝸牛鳴くか雨夜は竹の奥
牡丹　唐獅子にうき名のつらき牡丹かな
杜若　田の中やあちこち花のかきつばた
藻花　藻の花に小便をする船頭かな
蓮　捨舟を隱して蓮のさかりかな
　　溯松の奥靈地あり蓮の花
　　又一人足洗ひけり蓮の花
撫子　撫子やひとり晝寐の檜木笠
麻　山陰や一村暮るゝ麻畠
夏草　夏草や端山の裾の野雪隱

夏雜　市居

　　夏もはや掃溜虫の鳴く夜かな

○秋

初秋　牛牽いて川渡りけり今朝の秋

初秋のまぶたに涼し芳野山

初秋の竹の枯葉や竹の垣

殘暑　東京といふ名に殘る暑さかな

八月　八月や月になる夜を寐てしまひ

二百十日　乞食の二百十日も死なずして

秋夜　秋の夜や淋しきものに灯の光

夜寒　蟋蟀在堂溲瓶を抱く夜寒かな

秋の暮　耳つくの耳立てゝ居る秋の暮

行く水に小鍋沈みて秋の暮

語るへき友もなくて

橋踏みにひとり行くなり秋の暮

行秋　行く秋や太山を出づる水の音

燈籠　海人が家の燈籠暗し盆の月

高燈籠枯葉と共に卸しけり

迎火　迎火や燃え立つ程にかしこまる

送火　傾城の送火急ぐ化粧かな

砧　夜咄の夫呼び戻す砧かな

稲妻　吉野にて

稲妻や天の一方に花の山

梅龕を悼む

稲妻のといかずなりぬ苦の下

月　名月やわが妻載せて渡守

名月に鏡磨ぐなり京の町

名月や花見衣裳の物すごき

名月や鶯の啼く山あらん

蘆のかげに何雲動く湖の月

月更けぬ山をめぐつて歸る人

月白し洞雲院の屋根瓦

月出でゝ暗くなりたる雲間かな

乞食を葬る月の光かな

唐崎の松の月夜は雨青し

竹藪の上三尺を渡る月

古城趾觀月

落城の雲を出でたり今日の月

剃髮して

髮剃りて留守頼まれつ寺の月

石山よりの端書本日受取り候清遊羨

しさ限りなし吾もいつかと思ひ立候

といふていつくもるやら秋の月

寄月戀

思ふこと月より上の心かな

秋雨

梟の夜も寐るらん秋の雨

石山の石洗ひけり秋の雨

秋風

大阪や屋根の上吹く秋の風

芭蕉破れて先住の發句秋の風

芭蕉破れて酒旗を吹くなり秋の風

古關を通りぬけたり秋の風

秋風のさわぐ柱や團扇かけ

髮を剃りて

南とも北ともいはず秋の風

野分

南天や野分のあしたばらり〳〵

露

白露に印幡の沼の夜明かな

白露や淡路は明の潮ぐもり

露白し稻葉の果の筑波山

星月夜　見に行かん野守の鏡星月夜

雁　蘆原やはらり〳〵と落つる雁

天井の隅で鳴きけり夜半の雁

山雀　山雀の山を出でたる日和かな

渡鳥　曉の燈臺消にて渡り鳥

啄木鳥　啄木やつゝきあらして不破の關

鰯　殘してや家路を急ぐ鰯賣

秋螢　我耳に風吹く秋の螢かな

秋蚊　沙彌某の病めるに

秋の蚊よこの子ばかりはさゝざらん

秋蟬　死ぬかとてしばしながめつ秋の蟬

蜩　蜩に毎日暮れてしまひけり

蜂　絲車やむ時壁のきり〳〵す

濱松泊

つぶれ家は何處に泣く子ぎきり〳〵す

濱納屋の破れ網這ふいとゞかな

蟲　蟲どもにから辨當をゆづりけり

一葉　今朝見れば淋しかりし夜の間の一葉かな

雨あがり散つて濡れたる一葉かな

二階から落つる扇の一葉かな

柳散　散る柳尾に振る牛の背中かな

紅葉　奥山や紅葉掻き分け鹿の角

潮滿ちて漁村影あり夕紅葉

鹿の角ふりさけ見たる紅葉かな

椎　笹の葉に椎の實落ちて風淋し

梅もどき　紅葉した露なるべしや梅もどき

栗　栗拾はゞや先づは主無き山尋ねばや

薄　花薄曉の鐘に露ほろ〳〵

落武者の一人になりし尾花かな

大砲の畑横たふ薄かな

朝顔に女の結ひし垣根かな

萩　白萩に驛路の鈴の夜明かな

山門を出て

萩に風思ふことなき別れかな

秋海棠　秋海棠朽木の露に咲きにけり

芭蕉　長安の町はつれなり破芭蕉

義仲寺蕉翁の墳に詣で芳野來し笠なれは緒を解きて後の芭蕉に懸け

みよしの丶秋風うつす芭蕉かな

蓼花　古池やはうけて蓼の花盛

菊　月白や寒げに立てる垣の菊

瓢　水音や川添垣の青瓢

秋雜

三井寺

鐘古りて杉に聲あり三井の秋

○冬

初冬　初冬や日影薮漏る寺の椽

初冬の尾花にきらふ夕日かな

霜月　霜月の川口船を見ぬ日かな

師走　洛陽の灯ふぴたゝしき師走かな

歳暮　行く年の帆柱多き入江かな

冬夜　冬の夜や寺の流しに鳴く鼠

無得子と別る

冬の夜を海と山とに別れけり

寒さ　夜もすがら鐘撞く人の寒さかな

蛸の抱く鳥居に海の寒さかな

冬籠　馬がくふて垣まばらなり冬籠

火桶　うき人の目鼻口畫く火桶かな

炭　星の飛ぶたぐひなるべし走り炭

鉢叩　清水の灯は暗うして鉢叩

煤拂　長持に雞啼きぬ煤拂

風　風や富士の裾野を吹きまくる

風や眼をつむりたる馬の上

風のあとやまことに山と川

風の我影を吹く障子かな

時雨　富士晴れて月ずしぐるゝ清見潟

江を横に露の松原やしぐれあと

小夜時雨溝に湯を拔く匂ひかな

小夜時雨舟流れると人の聲

横町の時雨出て來る屑屋かな

うき人の傘さして行く時雨かな

しぐるゝや野寺四面の大根畑

鐘暗し姑蘇城外の夕時雨

から臼の厨に響く時雨かな

島陰やしぐれて落ちし三日の月

鷺の羽に夕日をかざす時雨かな

十反の帆にしらむ日をしぐれけり

八景は一つ〳〵にしぐれけり

宵の間の稻妻かきて小夜時雨

しぐれたるあとさき長し瀨田の橋

月消えて浦わの霜や立つ煙

霜　大坂にて

鐵柵の霜や夜明の電氣燈

雪　雪に鳴く鴉の聲は黑いもの

白鷺雪を離れて浮ぶ渚かな

御車を大路に立てゝ夜の雪
手探りに香爐を擁す夜の雪
川黑うして舟に聲あり夜の雪
江の雪や人の聲するとまり舟
古杉に道ある雪の峠かな
山門の鐵網に入る霰かな

霰

松の葉をこぼれて落つる霰かな
星消えて闇の底より霰かな
馬を入れて袴たゝめば霰かな
驚破霰狐啼く聲やみにけり

冬月

松原や闇の上行く冬の月
池氷る山陰白し冬の月
冬の月淋しがられて冴えにけり
寒月や高い窓ある庫裏の闇

枯野

枯野原風のとだにに星が飛ぶ
夜々は霜に星ふる枯野かな
煙突の煙に暮るゝ枯野かな
鹽賣のから荷は寒き枯野かな

冬川

大坂にて
冬川や燈火樓臺一萬家

氷

泉水に鼠の走る氷かな
谷川に小鍋の氷る木曾路かな
牡蠣舟の並んで氷る干潟かな
引汐に小貝の氷る眞砂かな

千鳥

月の洲に足もと暗き千鳥かな

鯨

牛に乘つて鯨見るなり佐渡の浦

紅葉散

水音や谷ほの暗く紅葉散る

落葉

辻堂は銀杏一樹の落葉かな

辻堂の闇にぶつかる落葉かな

冬木立　冬木立奥は社の鏡かな

茶花　茶の花に京の古寺荒れにけり

留別

茶の花は別るゝ日にぞ咲きにける

冬枯　冬枯をぐるりと湖水々寒し

水仙　水仙や鷺呼んで來て庭造る

寒菊　寒菊や霜の板踏む路次の内

枯菊　枯菊や馬洗ふ湯の流れ入る

枯蓮　枯蓮の玉といつはる霰かな

枯蘆　枯蘆や野原の中の晝の月

枯尾花　根に殘る力や雪の枯尾花

○

雜　雲早し螢の如く星が飛ぶ

ある俳人奇石を藏す蛙石といふ賛せよといふに

古池やこいつ投げこめ水の音

和歌

題しらす

みちのくのいはての山の山の井の
氷の下やもみちなるらむ

汐みちし程にや波のこほりけむ
蘆の枯葉に氷かゝれる

大野にて相知れる村學に寄す

君が住むあたり野山のたゝすまひ
また來て見む松をなきりそ

大野在のとある小丘に庵を結ひて行すまし
たる比丘尼あり一夕無得子とこのほとりの

逍遙にそか讀經の聲をきく玲瓏珠を轉ずる

が如し此尼に贈る

風すさふのみとれもひし松陰に

ほうちそわかときくそうれしき

冬　岡

柴たきて終日人のくらずらん

岡にはたにす煙たつ見ゆ

○

情鬼

夜ははまいその松に時雨れて　闇は遠沖の波に沈みつ

雲にひろかる月の明りに

島より島になきかはす

千鳥の聲ずきこゆなる

霜置きにける筈の上を

夜嵐寒く吹行けば　結びもあへぬ夢にして

綱手のきしる音すなり

思を運ふ岡の邊の　枯木の中のひとつ松

下枝の蔭の古庵の　主人も未だ寒き夜を

いねがてにして埋火を　掻起しつゝ座りけり

兄よと呼べはふりむきて

弟といへば這入りけり

けふ狩取りしひわ鳥は　翼をなめて吊したり

今獲し程の鱗は　籠の中にず躍りける

兄よと呼べはむきなほり

弟といへばすわりけり

外は松風谷の聲　殘れる落葉まき上げて

戸に吹寄て靜なり　兄はしきたる鹿の毛を
弟にやりてしかすれば　弟は持てる燒米を
兄にすゝめて啖はしけり
又吹すくる山風に　落葉散りつむ谷ふかみ
鹿やわくると足音を　聞ばやう〳〵此方にて
戸にきて叩くをさな聲
まきればあらずさいつ頃
花のもとにて死したりし
弟こそはは〳〵と　あまり淋しき夜なれば
黄泉よりこそ參りたれ
あらなつかしの弟や
父と共にや參りたる
母と連れてや參りたる
否とよ人を松かげの

時雨にぬれて肌寒し
姉さへ參り玉はぬに
天雲四方に充滿て
道さへ遠く隔たれば
疾くこゝの戸を明玉へ
さのみはとかめ玉ふなよ
星さへうすき常闇の
父や何所にいますらん
母のかげさへ見えぬなり
獨佇みならの樹の　蔭に泣きつゝ我居れば
暗き梢にぬえ子鳥　來なくを聞ばちゝのみの
父は奈落の底ふかく　沈み玉ひつはゝそはの
母は御空の上たかく　花の白雲ふみ分けて
天にず上り玉ひける
心空にてなかむれば
雲の絶間にかけさして　光を射出す光景は
青葉を暗き夏の夜の　谷を隔てゝ我家の

窓さす火影見る如く　ものなつかしの月影や
母や其方に居玉ふと　聲の下より我肩に
かひなをかけて引きといむ
誰ぞやと見れば姉こそは
さも美くしき衣きて　天人と見え玉ひけれ
母と二人は淋しきに　汝もこよやと手を曳て
連れ行かれんとせし程に　父ませばこそ天上も
何か樂みあるべきや　行かじと身をもだへ
見れは姉はや影もあらず　子規さへなのるなり
父尋ねんと中空に
あはれいまはの言の葉に
父忘るなとの玉ひし　聲をしるべに行く道の
遙けき程を後にして　出れば海の邊なる

洲に立つ鳥に羽あれど　天の羽衣身にそへぬ
我ばかりかは磯に居る　鹿は妻をず戀ふと聞
なきて後の山さして　木の間の月とず入にける
沖の浪風あらくくして
山に嵐を送るなり
浪の底行く舟あらば　奈落の底を尋ねてん
出てよと希ふ折柄に
出づるや空にむら雲の
嵐を捲て下りくれば
浪もみ空も一つにて
上より落つる大浪は　峯につみたる白雲を
一度にくたく如くなり
目くらみて足もたまらず
闇の暗さの果しなき

海をくゝりて沈み行く

或はきらめく焔の中　鬼の聲々きこゆなり
身は岩石の如くにて　泡をつかんで落行けり
目に見る者は形なく　氷の上をすべること
身はとろけたる鐵の　海の底なる荒岩に
耳にきくべき聲もなし　青き光のさしそひて
靡て生ふる藻を見れば　父の聲こそきこえけれ
千引の岩の下よりは　痛や我髪ひくはたれ
藻を力にて這行けば

云ふは女の聲にして

正しく叔母か聲なりき
此悪縁にさそはれて　奈落の底に沈みけん
父あさましの成行や　岩の狹間に身を入れて

父はありしにかはらぬに　髪自から動きたり
叔母は額に角生ひて　舌の先より滴りの
顔は蒼ざめ歯をむきて　淺ましし父はうれしげに
血潮のたるゝ膝上に　血潮を嘗てゐはします
肱をつかへて雫なす　立んとすれば腕をひき
顔をそむけば搔抱き　胸の邊のしたゝりは
口を引むけ血を吸へば　父よ〳〵と叫へども
あたりにちりて腥し　憎き叔母やと不思も
きこえねばや知らぬ顔

云ひし計りの一聲に

叔母と見し鬼飛ぶよと見えしが　其處は忽闇となり
岩戸隙なくとさしけり
裡のけしきを猶きけば　父と叔母とは諸聲に

泣く音悲しく聞ゆ也　叔母は岩戸に近よりて
聲もおのゝきわはれにて　身を燒く如く堪へ難し
泣けば涙の熱くして　いたや心にとほるなり
立てば筵は針にして　底なき穴にや落にけん
すわらんとすれば猶深く
はやこゝの戸をあけ玉へ

あけよと呼ふは父にして
魂きる聲にない玉ふ　あけんとすれど露許り
動かん者かかひなくて　岩に爪かく計なり
裡にはせまる泣聲の　聲を放てるくるしげに
たえ〳〵落つる岩の戸の　潮の雫からくして
いはんとするに聲出でず
かよわき腕に叶はずば
二人の尼の世にいます

今こそ呼びて參らめと
思ふ心のたゆむ間に　すかりし岩に掛し手の
手弛む綱に驅出ゴる　春の牧場のあらこまの
みそらをかける如くにて

二せの絆を松か枝に
つながる緣はのがれまじ

いさことさそふ一聲は
それかあらぬか朝なきに　筈の上立つむら千鳥

人柱築島由來

第一段

第一場　明石の浦

本舞臺は一面の平舞臺にて中央より左右に開きて老梢蟠屈松の木立生ひ茂り幹は人の影を藏すに足るへく樹間には蒼海隱見する景致あり平舞臺の前側一面は浪打寄する際より白沙の濱邊にて後側一面は海上の景色を見せ洋海漫々煙霧朦朧の裡に淡路島を望む書割など宜しく中天には高く玉兎を懸け此處都て明石の浦の躰八月十五明月の夜景なり

管絃の調にて幕明けば極めて華麗に艤裝したる樓船仕掛有て上手より動き出で舳を右手なる松の立樹より下手の方に少し突出して管絃の聲遏むと共に浪打際に止まる

平宗盛同經俊及ひ侍難波六郎船を下りて登場

宗盛　此處は明石の浦とやな、空蒼々と隈なき月影、光源氏の其の昔を宛からの景色にて、磯打浪の音迄も、浦山敷聞ゆるぞや、

經俊　遙々出し浪の上に、風も思はず雲も見ず、

宗盛　何と經俊、此さやかなる月の光に、戀しき人の面影を照らして見たき願であらうの、

經俊　涙に月の濡れもせば又一しほ、かう隔りては都も遠く、福原邊も其處とは見わす、月に對して觀念の心を澄す折柄なるに、よしなき言を言ひ出して、おどろかし給ふはなにこと、人々船を下られよ、白沙の磯は霜を置いたる如く、青松の蔭は珠を列へしにさも似たり、何か此處らに面白き形せる石がな有りさうなものよなァ、

ト腰を屈め小石を拾ては投け取ては捨る摸樣あり、侍松王大納言平頼盛及び侍二人船を下りて登場

是々松王落ちたる珠を拾はうぞ、

松王　（旁白落ちたる珠を拾ふとはげに言はれたり天下の重寶平家に集

まるの譬、嗚呼何處の王土、海の底を潜るに非ずんば爭で主なき寶を覓めん、

頼盛 浪の上の遊興は、珍らかなるに浮かれ來て、此處明石の浦、我等は新賓、殊には今日の今宵、明月の夜に邂逅ひ、一生の觀會、齡を延ふる心地の致す、

侍一 御供申す我々迄、

侍二 風流の面目を存じまする、

六郎 (旁白)一の空の月の下、山も海も谷も川も、光と影に變りあらうや、名所とは何、淋しさをいふ事か、月見の御所に月見はせいで浪路遙々ハテ大儀や、月の容は何處も圓いは、三角の月を觀やうとて龍宮迄も行く事か、サテ〳〵興なき道遙ぢやわェ、

宗盛 いかに六郎

六郎 ハヽ惟光と召給ふか、此の人氣もない海邊にて何人へ御文、若しや又、此のあたりに天降りたる天人棲み、豫ねても御心寄せられしか

經俊 松王是れ此の石を見やれ、

頼盛 橘登塲

ハテ誰やらか顔に肖た石、

經俊 また とない景色ぢやな

各々思入れる摸樣にて間を塞ぐ

「卯辰集 逢坂やたの〳〵月のおもひ入れ 邑 姿

あら戀ひし若しやあの月が鏡で有らば、父上の御顔は映る筈子の面影をも見給はゞ、定めて御詞も聽にぬらん、嗚呼思ふまい、思ふまじ、兎餓野の庄司が一人の娘、憂きつらき事知ざりしは、此身ながらに遠き昔、昔といふはるけき者と成たるか、住馴れし古郷をば非道の平家に追拂はれ、泣いて出でたる旅の空、明し兼ねたる假の宿、親子一所に在るならば邊土の住居も何厭はん、斯るべき世の定と思へば、昔といふつれなき戀人には恨もなし、父上樣の中々に在甲斐なしと訴訟の門出、もしや昔に復る事かと、昔といふ魔に誘はれた

か、空頼して止めもせず、信樂笠に竹の杖見送つた時の其心、淺ましや喜ぶとは、今さら思へば憂き事の積るも報、親子別れて音信も夏より秋と過ぎ行て、招く尾花にわりなき思、慰む方も有らんかと、影に連立つ月の徑、倘向ふより來給ふに俤ばかりも逢はんかと思ふばかりに夜毎の出歩き、行くは倘やと空頼にも頼有れど、歸るはつらき霞の徑、オヽ嘸や千鳥が待つらんを、

六郎　(旁白)はや御目にも留りしか、

宗盛　(旁白)ささな驚かしそ、寄り來る鹿を、

頼盛　名處の中には名所あり、此邊の名所、年久敷福原に住みたれば松王こそ知りたる筈、先づ是れなる松の名を何とか申す、

經俊　其儀松王に問はれん迄もなし、木陰の珠の石拾ひ、イヤ玉取の松とか申、されば古き歌にも、珠取の松の下ととりとり〳〵に持囃すらん後の世迄もハヽヽ

頼盛　ッヽ、一段と詠んだ、先程預けし金谷の杯、是れによつて許すであらう、

船の中より笛一聲起こる

橘　妙に恠しき遊樂の昔の夢を覺ゆる調。

笛の聲に聽ほれ項を垂れて徐に歩み寄る

六郎　如何なる者かと思ひしに、こは是れ女

宗盛　(旁白)月に傾く額付、嫦娥の下界に降りしか、人か女か、不思儀なり、月の光を遮りて夜遊の圓居に寄來りしは、如何なる人ぞ、なのりめされい

橘　道行振の垣間見ばかり、御妨とは存じませず、御咎有れば是非もなし、元來し方へ歸りませう、

六郎　いや待て女、歸しはならぬ名乘れとこそあれ妨とは仰せられぬ、隱すべきかは、名乘れ〳〵、

船に樂聲遏む續いて平重衡同業盛及侍三四人登場

上手には松王頼盛少し下て以前の侍兩人猶下て經俊其他の

一同は畢く橘の前に群集す

橘　扨は名乘れとのたまふか、

宗盛　如何にも、

六郎　其通

橘　如何なる者ぞと問ひ給ふ、其方は奈何なる人やらん、

經俊　(旁白)いみじく言ひたり女の武夫

六郎　問ふも愚や、愚の問言、今普天の下靡かぬ草木なく、率土の濱浪も騷がず治まれる御代、

經俊　(旁白)築島の崩れしは不知

六郎　いやさ蒼天に月日の光、到らぬ隈なき御威勢、王土の民に有りながら、六波羅の公達に畏を知らぬか、

橘　さは平家にて在しますか、平家の公達と聽くからに、此方に恨有磯海、蜑の子なれば、宿もなし、よるぼかりなる浪なれば、いざ歸らん戻りませう、

六郎　何、平家の公達に對して恨となし、

侍二　やよ待て女、

侍三　立去る事は、

三人　成らぬ〳〵、

侍一人童一人舟子一人登場離たる處より見物す

橘　恨といふに歸さぬとや、恨みて浪は返るものを、されば歌にも住吉の、是れは住憂き世の例、待つは辛くもなからうかは、嘸や待つらん待ちくたびれて、

元來し方へ歸らんと身を背くる時侍二人立塞いで

侍二人　成らぬと申すに、憎き振舞、

六郎　そも平家に對し奉り、如何なる怨有てか、

橘　何が左程に恠しいやら、非道を道の掟故、訴訟長びく民の愁歎、神にかこたん由もなければ、怨は平家に集まる世の中、

重衡　聽捨てがたき言葉の末、

業盛　もしや逆徒の餘黨ならんか、

六郎　必定逆徒の餘類御座んなれ、某屹度詰問せん、

舟子一　舟子二人船を下て登場一人は松の根に登て見下し

舟子二　アこれ

是りや好い姫ぢや

といふを下に居るが引落す一寸滑稽あり

宗盛　いや待て六郎、かくては徒に時刻移らん、是なる女の唯今の詞たゞ人のいふ可き事とも覺えず、詮義は後日かく言ふ宗盛が引請けん、いざ搦取ッて連行くべし、

重衡　さは去り乍ら數ならぬ女一人、

六郎　如何にも物數ならぬ女一人、引立てん迄もなし某是れにて、

宗盛　いやとよ六郎、引けは本末寄來る手懸、女なりとて逃すべきや、如何に者共ソレ牽き立てよ、

侍二人ハッと答て橘の手を取る

頼盛　暫く暫く、我等が月見の遊船に、左樣の者を乘せん事思もよらず、松

王彼者を許して得させよ、

梁王　こは難有き仰なり、

松王下手に進む侍兩人捉へたる橘の手を離す

宗盛　許す其儀は叫ふまじ、此船に叫はじとならば此邊に海人が漁舟、六郎尋ね參れ、

六郎　畏りまして御座りまする、若しやかやうな船では、

ト宗盛を木陰に招き耳に口寄せて耳語けば宗盛合點の思入れ有りて前處に復り六郎は其儘下手の松蔭に身を隱す松王

其方には無頓着にて

松王　いかに女、下として上を訕る事、聖賢の世にも宥なき罪、天に向ッて唾を吐くに異ならず、其許女性の身なりとは言へ御咎遁れ難き唯今の過なれども、月の御遊の船路の末蜑の囀猿樂言を申すと聽捨て給ひて、此儘御暇給はらんとの御意難有と思はれよ、宗盛に向ひ此上は君にも御允、

宗盛　心得たるぞ、

松王　訴訟申す事あらば公廳に參ッてこそ申す可けれ、正き筋を申しても聽かれぬ事聽かれぬ事はなき道理、もはや家路に向はれよ、

橋上手へ退場

頼盛　由なき者に妨げられ、興もはや盡きたり、いざ船に歸る可し各〻船に移られよ、

舟子共童諸侍咸船に上りて退場、其間に重衡は松王を木陰に招きて私語く事有て重衡船に上りて退場仕掛にて月少しづゝ曇る

泡と見る淡路に落つる曉月を、角の松原邊にて眺めんは如何、喃經俊、

經俊　願はくば其松原が此處にして、落葉の上に寒からぬ程褥重ねて有るならば又ひとしほで御座りませう、もはや東からとも西からともなく、自然に眠たう成ッて參ッた、

頼盛　いざ皆船に移られい、

退場

業盛　籠の鳥を逃したんな、

船に上る

經盛　萩に濡れ行く後影、笑止や月は潮曇、

船に上る

宗盛　拂ひし露にも蹤は知る可し、後吹送る風よ音すな、

同じく船に上る是にて舳の方より動ぎ出づれば泛び出づる模樣にて樓船奥へ退場少焉下手の立樹の陰を出で難波六郎

再び登場

六郎　兎餓野の庄司が女、扨こそ此邊に隱れ住むと覺えたり、竊に後より追懸引連れ參らんと君を賺して船に返し、ハヽ是れにて年頃の思を遂げんと思はゞ先づ遂げたやうなもの、假令ば山深き隱家に鍋の下煙たく住むとても、彼女の傍離れず在るならば、イヤ〳〵

さありては此の身の不運侍冥利いとつたなし、諸侍有が中にも人の上に立つ難波六郎、女は二ヵ月利運は一代、庄司の娘も女は女、女故に是迄立てたる身上譽むざと棄てんはおぢまし〳〵、たかゝ數ならぬ女一人手に入れん事何條有るべき、望の上に望叶はゞヤレ〳〵どうやら望が二たけた競合うて喧嘩うてハテ心が右左り、出世もはし女も御座れ、イヤさううまくはまゐるまい、仰の如くひきひきつれゆかん、イヤ待てしばし、牽連ゆかば色好の宗盛卿、やはか半分遣らうとはいはるまい、勸賞欲しからぬにはゆめ〳〵なけれど、年頃思を懸けし者を、ハテ居らぬといつはり身ひとつ歸る、どッこいなこれとても鳥の巣覗くやうには行かず、御不興といふ風吹かば、柁の取樣むづかしい、連れて逃げんか、身に着けた實はなし、棄てるは惜しき此手と此手、孰れにしても引連れゆかば、豫て願の位司、女をまゐらせ易へたる例、ハヽ、先づ此邊とめど著けて、夫れ後追うた合點だ、

松王　退場　上手の立樹の陰を出で松王再び登場

邊土に住める女の身の平家に對して怨みとな、嗚呼富貴榮華、かく迄に果敢なき者か、眼前平家の公達と聽いて、纖弱き女に有乍ら今の詞のありやうふし〳〵、げにや正しき筋申してだに訴訟聽かれぬ例有る今の世の中、諫めまゐらする人もなき有樣、其れに引替、動かじ畏れぬいみじき振舞、災の種を蒔くとは、神ならぬ身の爭で知るべき、歸る後より追懸て住家を見居よと、重衡卿の仰、後日定めて御報有可き御諚と覺えたり、數ならぬ女のかことばかりにも是れ況てや壁に耳有世の中、平家に對して蔭言を申者に一々の御咎、嗟に平家ならぬ人は、何處にか山の奥を覓めん、無殘やな澆季やな、聽かじとすれど、虫の聲々、是も平家を恨み喞つか、見じとはすれども今の面影、網の中にも魚は遊ぶか、宗盛卿と言合せ思ひもよらず松陰に忍び居て、六郎後を追ひしからは、運命の手は淺ましやはや居いた、救はん事もはや叶はぬか、嗚呼未來は知らず、何と成るべき

第二段　明石の里外　橘の隱家

本舞臺正面よき程の所に竹の網戸の片折戸を設け上下共に竹の生垣を圍らし折戸の奥には庇煤付て黑く古びたる藁葺の家臺あり竹椽などけうとげに垣の外は草葉繁く生ひ都べて里外の一つ家橘及侍女千鳥が隱家の躰なり少し下手に傾けて薄曇の月を見せ景荒凉

橘登場

橘　嘯千鳥今戻つたぞや

戸を叩けば片折戸自から開いて橘裡に入り竹椽に腰打かけ扨は又餘り歸りの遲いを氣遣うて尋ねに行しか、月が曇れば心も曇る、今迄隈なく晴れたる空の何處より雲が聚るやら、心の空も何時となく苦勞の懸る心細さ、見識らぬ人に物な言そと千鳥が豫ての諫平家と聽くより前後忘れてよしなき詞を出だせしより、辱を受て思はぬ時を移せしか、又待詫びて迎に出でしか、迎に往かば嘯父上をゐて來て給、こゝさへ今は住憂き世の中、平家の影のさゝぬ國有らば、其處迄逃げて親と子が片時離れずくらしたや、待つ身に成りて詫しきは待たるゝ時の千鳥も嘯、もう歸ッても來ぬらんを、

上手より松王下手より六郎登場左右竹垣の外に彳立

六郎　あれまた雲が晴れかゝる、其處にあるは千鳥でないか、目に留りしか南無三寶、恥しや明石の月は美しき貌ばせ、嘯橘御、難波六郎ともある武士が御身の爲に今宵限り傳來の弓矢捨てたぞや、邂逅ひしは奇しき緣暫し驚く虫を押へ、我言ふ事に心傾け聽きたまへ、思へはつらし君が故郷、鬪鷄野の邊には何時の頃よりか、オゝ彌生の春の櫻狩、人は居らで宿は古りけり、垣間見の顏蜘蛛の巢に撫でられしは忘れず、くも手に物は思へども、主は影なく成ッたるは誰れ惡き奴奪ひ行きし、妬むといふも思ふから、夢に見るより忘れもせぬに、今宵の月見はあはれ〳〵何佛の誘導、月に玉照る艶なる容顏、御身と見るより主君を欺き、御咎もなく安々と歸らせし

は皆此の六郎のはたらき、先程辛く見ねたりしは詐らんが爲の謀策、必ず惡う思はれな、惡人ばらの平家は皆船に乘る身共はひそかに身を隱し其方の後姿を案内、其方か踏みし逕の草を其方の裳裾踏む心地、かく成るも因緣、最早生きて平家に見えん事叶はず、今迄の身上罪なうて棄てんこと惜しとだに、遲迄うた嬉しさにはゆめ思はず、見るから勝る戀慕の念、何も蚊も捨たゝ此心に報いんとならばナ是れ唯の一言此六郎をいとほしと、

橘　ェヽ、聽たうもな、何故千鳥の歸りは遲いゞ、

六郎　何、男の歸りの遲いとな、さあらば此處に居らんは無益哺是程のわが情うれしいとは思はぬか、これ嬉しいとは思はぬか、まこと情知る武士とは我れ、つれなうして悔むまい、ハテ見れば見る程いとしらし、更めて色よい返事サヽ何と、

橘　ェヽ、情知る武夫は人を刼す者ではない、

六郎　愚、々、狐に捉らせじと思へばこそ鷄をば塒に追ひ込むならひ、斯うしてあらんは危ふし〳〵、夜の明ぬ間に逃げのびてやがて情の程は見せう、かう間近くての對面今始めて、先づ少しなりと逃てから積もる恨、サ背に負はうか、かい抱かうか、

松王　（旁白）あら堪へ難、いで助けんか如何にせん、

橘　アレ哺人はなきか、

六郎　もう我が物ェヽ、聲たてな、祿も棄てたは、

ト橘をかき抱き左の掌に橘の口を押へ折戸の外に出づ下手

千島　よりバタ〳〵にて千鳥登場

ヤヽ、曲者、おのれ君をば、

懷劍を拔いて切ッて掛かる六郎橘を棄左手に押へ太刀を拔

放て寄來る千鳥の肩先を斬付け又振翳す所を松王後より寄

て臂を把れば千鳥は隙を得て潛り込六郎の脇腹を貫く、

斃る

六郎　何奴ゞ、

松王　（旁白）六波羅の侍にしては無殘なる最後、さもあれ報は遁ざりけり

唯身後にあはれとも言はん人のなきこそあはれ、哀はや其眼には榮耀出世の幻も消えたる乎、

橘　喃々千鳥其方の肩には血潮が泉む、悲しや是は何とせう、

松王　さな歎かれそ、重傷に非ず、流石に此手に殺すに忍びず人に疵を負せしは我過なり宥さる可し、但し是に用意あり血潮を拭うて此藥を、程なく癒えんは疑なし、

橘印籠を請取りて千鳥を介抱する事よろしく有

又に觸れたる其痛は藥を以て救ふ可し、如何にせん平家の御咎、之れを救はん事我等が力の及ぶ所に非ず、是れなる者の此に忍寄りたる事餘の儀に非ず、竊に平家の公達の內意を受け、事を戀に寄せて御身を連行かん下心と覺えたり、一端平家の御疑かゝる上は迚るゝに難き世の例、今はははやかゝる邊に住居せん事、寄せ來る波を低きに待つよりも危ふかる可し、暇とりては及ばじ明日にもあれ其なる人の痛少しく癒るならば亟に此の處を立除き、西方の邊土になりとも落行かれよ、一樹の陰の宿なれば、斯申すも多少の緣自然某廻國の修行者にも身をなさば、又こそ御目に懸る可し、今は是迚はやさらば、

橘　喃暫く、御身是迚來給ひしは、そもまた何の爲なりし、先程濱邊に見えし御ン方、もしや我身を戀ひしたうてか、

松王　戀ひしが故に跡追ひしか跡追ひしため戀せるか、これにもあらずかれにもあらず、さりながら片時もはやく此處を住捨て隱れよとは我がまごゝろがいひたるぞや、

（旁白）戀とはいはじ斯る離別を、

橘　して御身の姓名は、

松王　名乘らん名なきをこの身なれば、人がましうな思ひ給ひそ、

橘　平家に加擔せん人は見えず、さてこそ其の名ゆかしきを告げぬとならば

松王　聽ずもあるべし、重ねて時も有明の、

橘　はや島隠れ落つる月

松王　(旁白)盡きぬ名殘を留置きて何處の空に又や見ん、主命重し

橘　見捨給ふか

松王　咎は重し、はやく此家を住棄てゝ遠きあたりに落行れよ、さらば

(旁白)思はぬ方に尋ね來てあはれを見たる心の果

橘　(旁白)思へばつらき憂身のゆくすゑ

二人　(旁白)行衛も知らぬ夜明ぢやな

別れ見送る摸樣よろしく月を落として此道具廻る

第三段　船見濱　浦の御所(福原)

本舞臺幾間は高足の二重にして正面中央程に段階を設け上下共に之れに續けて朱塗の欄干を取附け背後左右共に繪襖を以てしきる是等はいづれも色紙形に和歌の書讃などある金襖なるべし下手に寄ては大なる鳥籠に鶴を飼たり都て太政入道淨海福原莊中の一郭浦の御所にある一室の態なり

此に入道淨海は侍女數人と消閒の態にて貝ぶはひをして遊び居れば下手の平舞臺には侍女二人二羽の鶴に飼を與へ居る見得にて道具留る

侍女一人登場段階の下にて

小松の大臣御入來で御座りまする

侍女退場

重盛登場

淨海　是は思の外の下向何事のいで來たる、孫共の餘所なる童といさかひばし致せしか

重盛　此程は日を經て御對面も仕らず御異りなき御有樣いと悅しう存じまする

淨海　御内にも事なきよな

重盛　左樣に御座りまする

淨海　庭の池水水嵩減りしか濁りてありしが澄みたるか

重盛　澄みましたやうに御座りまする

浄海　そこが南庭の櫻本大方折れて幹ばかりに成りしとか惜しき事かな、さは有れど最早よき程の老木なればせんかたなし、此度は吉野の山に種ばかりを殘して山をさながらに移し植ゑなば春は雲の上に家居する眺め一段のけしきならん

重盛　げにや烈しかりしひと嵐に、さしも力を盡し築き置かせられし築島の、今來る道すがら眺むれば、紀念も殘らず迹形なし、櫻は愚か惜みても餘有る事、さりながら過たるは追ふ可からず、戒むべきは偏に將來、然るを人の申すによれば、此の前の例にも思ひ寄らせ給はず、此度成良に阿波民部大輔を仰せて、重ねて御造營有る可しとか洵、左樣に御座りまするか、

浄海　又ゞろの異見か、其れ言はんず爲態々の下向よな、わな聽ともな、

重盛　如何にも御諫言申さん爲、是迄下向のそれがしが心、父上御聽下されかし

浄海　入らぬ心づかひする人かな、先づ思うても見よ、武夫か弓に矢つがうて的に向ひ立ッたる時、當たるべきか外る可きかの思ひ、胸裏に馳せ違ふ時、放つ矢當りし例なし、さらでだに短き人間の一生を、さしも心を勞し愈短かうせんは、是れ天命に背くの罪、機に臨みていらざる心遣ふとつかはぬ、是れ戰の勝と敗れ、又一國の存亡興廢、アヽ性分とはいひながら、いらぬ氣遣せいでもの事、悵々として我と心を痛め齡を短かうせんは、孝行の道にもあらじ、左樣の心遣無用々々

重盛　理の仰、一圖に思ひ立たせられし御事なれば、しかおぼすもさることなれど

浄海　ヤア此の入道を頭を返して見る事知らぬ猪なりと思へるか、其が又いらざる氣遣の心より出るいらぬ氣遣、思うても見よかし、嘗て入道か一度思立たる事仕おほせざりし例やある、謀りし事と出來し事と嘗て差ひし例や有る、皇子に生れし祖先の家を昔に返せし

は誰が力、佛陀の冥護ありしとも入道が功なうては叶はぬ筈、さりながら折角遙々の下向一通り聽て得させん、とう〳〵いうて見よ難有き仰、人々暫く此の場をは

重盛

侍女皆後の襖を開て退く庭なるは上手に入る

扨も是迄二度迄の築島御造營、去んぬる承安元年には、深くとかうの慮もなく、一時多少の費とは存じながら、偏に將來の利益に心を傾け、却て御勸を申せし不覺、翌年八月二日の大風、潮水溯りて元の青海、殘念此上や候べき、去りながら本是人天に及ばざるの至す所斷念の外はあらず、既に父上にも御斷念有りけりと思ひきや、今年に及んで重ねての御造營、既に五月に到ッて半成たる上を、此程の嵐、折も折なり以前と違はず、かくも成果つ可きかと思ひたればこそ、此春の御異見、前に六月後に五月、此間下民の苦勞、諸國の難義、痛はしとは思さずや、憐み給ふ御心はなきか、仁德を思す御心はなし、まさぬか、此春既に詞を盡して御諫言は申し〻を其時の御言葉に民の難義を思ふならば一時の造營に費す所と、築島なくて此後年々に積るべき船子旅人共の喪ふ所、孰れか勝るを較べ見よとの御意又六ヶ月に成就せしものが、一年の間に成就せしと思へばとの御事、是れさへ今と成ッて押しても御止申さゞりし當時を思ふ悔しさ、御覽じはなされずや、あれ程迄に民の力を盡し、國の寶を費し、末代迄もと堅固を誇りし島なれども、扇にあふげば片手にも起る風、其の風の積りし嵐に應へたる荒浪は、許多の日數、許多の巖石、かさねて成りしあの島を、一夜の程に礎もなく打崩せしは、是れ先年の啓示にして、再び今眼前の天の諫め、陸に立てたる金城鐵壁といふとも、之れに居る人不仁なれば、荒れたる野原となり果つる例、況や是は海の中、夜ともいはず晝とも言はず、息む隙なき白浪頻に敲くなれば、奈落の底より築き上たるに非ざる限りは、縱令今より三度目の島築き有んとも、又其の島如何に堅固を盡し、來年の嵐を凌ぎ得とも、三年四年やはか其儘の形を殘し申すべきや、一年造營の

爲に失ふ所は、十年廿年築島有るに依ッてたすかる所を以て償ふ可きに非ず、たとへ築島の一つ宛年毎に築くとも、民間の嘆きだに無きならば、何をか厭ひ申さんや、幾萬の民の卒苦、國の財實を擧げて、悉く海の底に投げ棄給はん事、聖賢は過を二度せずと申すに、既に二度の御過有、如何ぞ猶此上に重ね給ふべき、唯々政道偏に正しく、恩澤遍く逮はゞ、四海の波自から靜に、天下萬民の喜び長く此上無かるべし、速に御心を翻し給ひ、此上重ねての御造營御止まり下さらば、重盛一人のみの喜には候はじ、此程言を盡しての御願、御聽入下さるべきや父上、

浮海

ヤァ入道なでうさばかりの儀知らざらんや、天然の機運、偶然の災害、何ぞさ程に驚かむ、九年の洪水、七年の旱魃、聖主手を束ねて傍觀せしとは聽かず、あれ許の嵐、年に一度有る程の嵐にてさへ、毀れし事、全く島築きの宜しからざりしが爲なり、建築其の法に叶はざる者の崩れんも倒れんも固より當然、崩るべき物を建てゝ偏に堅固を祈る愚が有らうや、暫く當年の建立堅固なるにもせよ、一度二度崩れたるを以て其儘棄置いて顧る事なからんには、島を築くばかりが人生の事業となる思ひぞ、其許の子供は一生殿上の交すらも叶ふまじ、又天下萬衆の憂などとは出來すぎた詞、浪に擊たれて消ゆる程の島一つ築きたるも、天下舌を捲いて驚きたり、再び築き上げたるには、入道を鬼神のやうにはやしたるうぢむし、开を此儘に止みたらんには、膽魂のなき世の中に入道が一世の嘲、家門末代迄の威德を墮すに似たり、其上此島の利益、萬世往來の便利其ばかりには非す、抑も上に立て號令を天下に布かん者、聚散自在の湊を控えでは事叶はず、天下萬代の繁昌の爲是ばかりの事を得せぬ入道ならんや、諫言は無益なるは、

重盛

いや左樣には仰あれども、我が國昔より例なき事、如何に堅固を盡すとも、人の力のなす業には限あり、畢竟は蟻の塔、人間の眼に大小あるのみ、去ればこそ既に是迄一度ならず、貴重なる民勞、國財、行衛

も知れず水の泡と成たるを、惜しむ心はましまさねか、惜ければこそ痛はしけれ、民の痛しきにこそ財寶をも惜め、如何で此春の再建をば御止は申さざりしや、其悔しさ念々忘れ難き此日頃、又もや重ねて來ん年に嵐あらんをふぼしながら、おきゝいれなきはおぼつかしや、

淨海 一簣の功を積まば山を海に移さんの何の難かる可き、況や既に二度迄築きし島の礎ある上に重ね上げん事何條事か有らん、たとへば來年の嵐三度此島を覆へさば四度築かん事愈容易くして愈堅固ならん、且や既に再度の試によりて建立の方利益を得し所多しか程の事を左樣に事々しう思はんは不覺なり、後世の嘲は思はずや、蟻さへ塔は築く者を、畢竟は蟻の塔、未だ夫れにも及ばぬ築島、十年さきを觀る眼あらば、其の異見はよも出まい、

重盛 はや其迄に思ひ入り給ひしか、さりながら嵐に崩されてより未だ月も半も經たず天下皆かの島の崩れしを聽き、もはや人力の及ふ可からざるを曉り、眉を顰めて候今、時機をもはからず直に御造營仰出されん事、天下人心の向ふ所に背かんは、世の中の誹、民間の難義も如何、自然建立の事はかゝしからずば、其期に莅んでの御悔みも有るへし、重盛願はくは暫く此儀御延引有ッて、諸國を賑はさん爲めの御仁政を施し給ひ、急がず機を待たれん事、是の儀は枉げても御聽屆下さるべし、

淨海 愚かなり〳〵諸國を賑はさん爲ならば一日も早く築島を成就せんには如かず、言ふも無益、聽くも無益、いふな聽かじ、海上に島一ッ築かん事の容易さ、すること成功せし入道が從來を見る目なきか、

重盛 アッ是非もなし、此上は改めて一ッの御願こそ候へ、前の民部大輔重能が事此度築島の崩れより當年の奉行なりしを以ての御咎、さりながら是は是れ人爲の風波にわらず天の怒なれば誰れにか其罪を責め給ふべき、重盛が御願は彼れが罪を宥し給ひて所領本の

如に復し給はるやう、いかで此儀ばかりは

浄海　ヤァ天の怒は入道の怒宥す事かッて叶はぬ

重盛　是迄下向いたせしに願ふ所一も叶はず空しく歸らん無念の程くませられて此儀ばかりは

浄海　切なるその志に愛でゝも宥したくは思へども償ふべき功なきに如何でまさ〳〵失へるものを與へんや姑息の慈悲は律の亂れ誠彼の者を其迄に憐む志有らば其者になど功を立てさせぬ是れ入道が口癖言ふにも飽く定めて聽くにも飽きつらん、平家の創業入道が一代にて心算悉く成就せば子孫は長く勝平の天下を承けん先づ其迄は入道が致さん事何事にも異存ないそれ、女共有るか、

以前の侍女等登場

二日三日はとゝまりめされや、昨日は我等此邊にて先づ是程の魚をば釣りぬ、ア、何とやら呼びしその魚をば

侍女一　鯛にてもなし

侍女二　鯉にてもなし

侍女三　はまち

侍女松風　いェ〳〵それ〳〵釣ばりの喉にかゝつたやうな

浄海　オゝそれよ、かれとやら

四人　オゝかれよかれ、かれよかれ

と輕く手を拍く

重盛　此程は何にかに付けて心急がしう候へば今日ははやかいとま

浄海　こは又急がしき出でたち、我等も五日ばかりせば上るべし、何事も深く心を勞するは無用ぞとよ、ヤヨ松風遙々來し人を空しく歸さんも如何、近頃得たるあれなる丹頂の鶴小松殿に參らせよ

重盛　はや御暇つかまつる

浄海　萬に付けて心遣を致されな、最早狩などもよき季候、孫共に怪我あらすな

重盛　左樣なれば父君

淨海　はや行くか

重盛　(旁白)畜類ながら心長閑なる歩み、憂を抱くが人間のわはれ靈なる謂はれなるか、

松風が鶴を追ふて下手に入る

後より退場

淨海　是れも興が盡きた、お忘れたり、誰れか有る、松王に參れと申せ

侍女　畏まりました

退場次て下手の襖を明て宗盛經俊侍盛國同妹尾三郎登場

盛國　評議仕ッて御座りまする

淨海　して何と一定致したるか

盛國　築島重ねての御造營に就て陰陽の博士が考申した人柱御召取の事

宗盛　某存するに誰彼と指して人を擇ばんはわはれを知らざるに似たり

經俊　且つ面白き謀にあらす

盛國　此上は別の方便も候はす、唯生田の小野の邊に新に關所を御据有ッて此人柱往還の旅人の中より召し給ばゝ是れそ誰彼となき千萬人の中に一人を得る計と存じまする、

淨海　夫れこそ我等が思ひし壺、盛國いみじくも謀りたり、波濤の嵐は天の作せる災、是れ國土衆生か作せる業の積りは民衆萬人の頭に懸ッて入道が功德は水の泡と成畢んぬ、去れば犧牲の人身之れを民間に就いて求めんは元來その理、まつた入道が慈悲の心を以て上下往來の船末代迄も風波の難義なからんが爲にとてする島築きの手始に海龍王をなだめ申す人柱旅人の中より擇ばずして他に何の方便か有る、か程の儀知らざるには非ず、唯試みんが爲に問ひ計らひたる所、盛國が思ひ付たる條、先づ以て神妙、生田の小野に關をすゑん事、速に取計らへ、關の司は妹尾三郎其方に申付る

三郎　難有く心得まして御座りまする、畏れながら人柱人躰如何やうの

者を

盛國　其儀は某既に承ッて御座れば、唯今御聽かせ申すで御座らう

經俊　先づは男子と心得られよ

淨海　老耄負載の者は叶ぬは法躰の者は許す可し

宗盛　容躰餘りに醜きも相ならぬ

經俊　(旁白)こりや又品定めが始まらんず。

侍女登場

侍女　御次にひかへ居りまする

三郎　然ればはや向ひまする

淨海　急いで事を爲果す可きぞ

三郎　ハア

ト答へ盛國と退場

經俊　あれへ參ッて品定を仕らう

宗盛を誘ひて二人退場

淨海　是れより樓臺に立こえ、改めて遊をなさん、先づ往きて用意いたせ

侍女數人退場

松王是れへ參れ

松王登場

松王　替らせ給はぬ御容躰、恐悅に存じまする

淨海　此程は逢はざりしが見る毎によき男子になるよ、扨々此間池の大納言どもが船路の觀月、其方も船に供せしよな

松王　仰の如く遙に遠き邊迄も光輝稀なる其夜の月影、今猶心に思ひ浮ぶにも眼を射らるゝ心地

淨海　して其夜明石の浦にて美しき乙女に出合ひつらん

松王　こは我君には蜑の囀、はや聽こし召されて候か

淨海　重衡が申含めて、其方に後を追はせし迄は彼より聽きつるが、偖如何やうに有たるぞ

松王　如何にも忍びてものを探ぐる、松王には相應しからぬ仰をうけ候

て月影にすかし彼の者の後をつけ

浄海　住家を探り當てつるか

松王　ハッ

浄海　如何なる住家なりしぞ

松王　月夜に見るもいぶせき宿、流石に人の住む氣には候へども、親族同胞しての住家とも見にす、軒のつまも傾きかゝり、本より蜑の小家なれば、とりとめたる標もなく、竹の垣去歳の古葉も拂はず、草葉の露道もせに繁りて、荒れたる宿の狀に見にて御座りました

浄海　荒れたる宿の狀、さこそあらめ、して有りし女は年頃其家に住む者なるか

松王　里の童の申によれば、久敷住みてありとの事

浄海　餘所より移り來しとは言はざりしや

松王　仰の如くに御座りまする

浄海　さも有る可し、鶴は鳥に群れず、必定一度は五ッ衣の袖に手を入れ

し曲者、平家に對して不敵の振舞、其方には事相應しきには非ざれども、餘人にては叶ふまじ、其者竊に相具して參れ、女一人の事なれば、事々しうは仕るな、また必ず其者に過すな怪我はしさせな又此事はかまへて人に知らすまいぞ

松王　畏ッて御座りまする、數ならぬ女性一人、召取て來る事には候へども、未だ覺なき御使、去りながら何事も御奉公、さ候へは我君急いて行き速に立歸れよ

浄海

松王　速に立歸れとの重き仰を身に負ひて左樣ならば我君

退場

浄海　（旁白）針あを枝に薔薇の花、どくゆかしげなる女

思ひ入れ有て立ち闌干の緣にて屹と前面を見渡し

あれあの海原動かぬ海の面、平かに潮を湛へ居るぞや、一度二度彼奴等平家を妬める輩、心の裡竊に嘲ッて心地よしとするか、一度二度迄毀れし者、通例にては叶ふまし、いや一度二度迄成たる物、三度

して如何でならざらん、三度三度此心の裏に告る聲、三度三度成就必定と嘱くなり、見よ／＼天が下の眼を擧げて見よや、渡津海の神も照覽あれ、末代動かぬ入道が、威嚴一世のかたみ、あれに浮へて見すへきぞ、藤原を祖先に名乘る徒（やから）まつた南都北嶺の俗僧共、佛神も擁護ある平家の威光、目前の標徴、目にもの見せてくれん

淨海及侍女退場

第二段

第一場　福原野外の場

本舞臺は一面の平舞臺にて正面よき程に一本松の立樹あり四邊の配置遠見の書割など都て福原より京への街道々筋を少し避けたる景色にて福原郊外の趣を見せたり

此處下手には重盛の從列數人中にも一人は然るへき鞍を置たる馬の口をとりて立ち又二人は鶴を入れたる籠二個を護り皆畏り控へ居れば少し隔て上手松蔭には重盛床几に腰をかけ松王と對談の躰にて幕明く

松王　露ばかりの御憂あるへしとも覺にぬ女性一人

重盛　咎むべき事かは如何にも其方が申す通に思へども家君一度思ひ付給へる事其上既に召連れ來れと迄仰有たる上は我にも止むる力はなし慈悲なしとな恨みそよ人の賴を受けて賴を果さぬ時は力足らずして是非なかりしにも賴みし人は賴をかけた人を恨み思ふは是常の人情恨の積る重盛が身の行末は何とあらう思へば平家に怨有りと其の蜚の子が申しゝは此方の胸にも響應ふる

松王　こは勿躰なき仰せ哉漏らぬ陰とて立寄れは却て袖を沾す雫御後を慕ひ是迄參り畏れ多くも御行手を遮りしは此年頃の御高恩聊か返し奉る事もなく松王か一期の御暇乞申上げん爲に御座りまする

重盛　何一期の暇乞とな

松王　されば嘗て身に覺なき此度の御使心にしめて承りては候へとも

人ふのがじしの命平家の御主と申せども心に任せ給ふ可きに非ず假令難なく其者を召取ては候共自ら命を果さんとならば嚴に擊て頭を碎きも致す可し怪我過あらすなとの仰かくて若し差は い武士の面目再び何で御前には參られ候べき必ず左樣ならずとも主の御吩咐もし仕負す事を得ざりし時爭で再び人中には交はり候べき松王一期の御暇乞に御座ります

重盛　夫こそ入らざる心遣成るもならぬも天命唯誠の心は天に通ずるとこそいへたとへ其者召取らるゝ共元來是一人の女性其機に臨では其者の命我誓て救け得させん心安くて參るべし

松王　あら難有き其仰もはや後安く參るで御座りませう御行手を遮て思はず時を過せし過失恐縮に存じまする

重盛　何そ過とはいふべき人を救はん稀なる志嗚呼志の行はれ難きは聖人も野徑に飢ゑ給ひし例もあり重盛愚味何ぞ比べん去りながら身殿上の班に列なりながら下の憂を見つゝ知りつゝ徒に手を

拱ね生を天地に偸む是はた天の命なるか者共馬を牽け

従者ハア

従者一　是已が襟の日當りに毛虫殿が出張て居るは

従者二　ウー

頭を縮一寸可笑味有て馬を牽き出れば重盛之に跨かり手綱をさばき默然としたる松王を顧み

重盛　松王さらばずよ

松王　長き御行末の道御恙なく

重盛及從列退場見送る模樣有て

仕へま欲しき君なるかなあはれ某風情が申す事をあれ程に聽き給ふか平家の御内に此君在しませば末長き御奉公頼あり捨果つ可き世には非ずとは言ながらかまへて人に漏すなと有し主君の御戒現在此に破りたる罪既に一歩世を後ろ嗚呼此後を奈何にせんありし夜あとを見棄てゝ歸さの道すがら胡蝶が釀せし菊の酒

仙家の杯に醉し心地行手を遮る濃き朝霧を押分て入る後より俤の引く袖ふり切て歸りしは主命の背かれぬ故山路の菊の露の間に何時か千年を經し思ひ心の空を歸るや否や召取り來よとの君よりとはよもや思ひ設けぬ仰濡れて干す間もなき袖にふり掛つたる身の置所あゝ何の報いずや一圖に仰畏りて引連れ參らば其時誓て命を助けんと小松殿の唯今の御詞此耳よりは平家に恨といふ人にこそ聽したけれ嗚呼戀か戀ならば忠義に代へん命助けんとはさる事ながら連れて參らば宗盛卿あの世にと知り給はねば六郎か歸りの遲きを待かね色にも出でゝ見え給ふ平家を恨む由緒ある人のおめおめ御心に從ふ可きならねば世には知られず命とられんあゝつかもなき思ひ過しよきに計らは命助かるのみならず却て思はぬ幸思はぬ幸とは何頼むなよ榮華ははかなし愚なり氣遣ふ迄もなしもはや其方はもぬけの殼是非なく歸て候と罪を身に負ひ暫く世の中を忍ばん迄大臣の御身にて有ながら唯

今の御詞世は棄がたき例ぞや

第二場　明石の里橘住家の場

本舞臺道具配置都て第二段と異ならず竹椽の障子一枚は明放ち二枚は閉て奥には唐櫃を据に傍に小太刀を置きたり若し强て前第二段の場と照對を求むれは室内隅々の有樣左右の書割など晝夜別趣の意匠あるべし

此に橘片折戸の外に身を寄せ手紙を讀み居る躰若くは手紙讀みながら片折戸にかゝる躰にて登場

(讀む)今はは や最後も近きぬとこそ覺にて候へ此病はたすかる間敷にて候訴訟叶ふべくもあらぬに何しに其方を措き參らせてかくは中空に漂ひ來りけむ思へば心地死ぬべく候されど御事を一目見ずては死ぬまじう候心狂はる中に顏を見せ給ふ可し千鳥を供にてはやく參られ候て此の身の内の熱き汗を拭ひ給はり候へされは心の曇もはれ西方の淨土に參られ申べく候戀しの我子橘

御　悲しや喃父上様條亂れし水茎の跡いや此の眼が眩みしかた
つた二人の親と子がかういふ目を見やうとて別れしは何事ぞ言
ふて廻らぬ父上様どうぞ死んで下さるな聞も習はぬ途なれど死
出の旅路は離れまじ一處に連れていて給はれ野行き山行き行く
〳〵野山の末の空頭擡げて橘が來るのを待ちてや居給はん時を
移すは道を隔つと同じ事はやかうしては居られぬあはれや千鳥
はあの痛手痛うはないといふは我身に見せる心あの容躰では連
れては叶はずといふて行かずには居まいか喃此年月の其方が志
口へ出していふ詞もない此身は今より返らぬ旅父上と二人して
行く程に今生の生別是からはもう世話もやかさぬ情ない事なが
ら是を切めての償ひ

千鳥　平家の逮捕今にも來るかと眠りながらも心安うはなかつたに覺
えず扨は眠りたるかまさ〳〵夢に見えつるは
ト障子の裏に獨語して障子一枚押し明くれば千鳥は床の上

に枕に凋れたり竹椽に寄り來たる橘を見て
こや姫君悲しい目を見ましたぞへ

橘　これ千鳥何といや

千鳥　現在向ひし平家の逮捕恐しいとも凄いともエ、もう此世がいや
と申しても御父上の御目にかゝらいではと言ふて此家に御出あ
つては後は千鳥がどうにも致しまするゞ早う落ち延びて下さり
ませ

橘　エ何聽て居やつたぞ

千鳥　聽ましたは打物の音あなたは平家に捉はれて世にあさましき繩
目の辱

橘　(旁白)解けても解けぬ夢心――手創をいたはり恙なうはやう成て
給はれ此内より朝夕に付けて平家の逮捕向はぬ間に此處を逃げ
よと其方の諫如何にも今聽分けた我身は其故今より此處を落ち
るぞや元より其方に罪もなければ定めて平家も見逃かすであら

うさらばはや行く程に

千鳥　待て下され橘様如何に未練な儂でも別をお止も惜みも致さねど

橘　止めては給るな

千鳥　御止は致さねど夫は餘旅の御支度も有るべきに

橘　いふて給るな別れの悲

千鳥　もしも途中で平家の者に見付けられぬやう

橘　いふて給るな

千鳥　何で言はずに居られませう

涙ながらにいざり寄て唐櫃の蓋を明け

平家の目にかゝらぬやう豫て申せし用意は是

唐櫃より衣裳を引出すを見て橘内に上る

橘　思へば其折迄は靜かなりし心喃千鳥平家の逮捕逃げたうもない

（旁白）此主は今何處に

松王が印籠を掌に載せながら男装す千鳥傍より手傳ふ

千鳥　其は此身をあはれと思ひての御詞捉られて往きたい御心か

橘　羞しきこの姿

男子の扮装を畢り印籠を懷に入れ太刀を佩く

千鳥　淺ましき世の中に心許ない一人旅先は備前の今朝も申せし通書

の道夜の泊氣を付けて下さりませ御父上に御便をしたら儂もあ

とから悲しい事を今いふは悲しや言はじと思へども急ぐ門出の

御妨此別が惜しうなうてあられうか年月二人して住む事もかう

いふ別をせまい爲

橘　もう後いふて給るまい行かねばならず急かねばならぬ今はの暇

乞其創癒やして恙なう世を送て給れもういくぢやさらば

橘出づれは千鳥椽の柱に身を寄せて見送る

千鳥　もう御出なされますか

橘　（旁白）此世の絆切らるゝ苦しみ

退場

此魂はあの袂に是がかたみと成たるか

橘が脱ぎ捨たる衣裳を抱く

むごい心で落させました今にも有れ平家の逮捕此家に向はば儂は縄に懸つても六波羅へ往て戀しい戀しい其方様の父御に若しや逢れる嬉しさ可愛い姫君を何で父御に逢すまいとは言ひませう平家の手に渡り給はゞ父上様に申譯ない故矢張可愛い心から落させはしたものゝ習はぬ旅の御疲勞もしや思はぬ事により御身に過あるならば一層縄目にかゝつても六波羅といへば親子御對面の便りなきにも非ず是れや過ちしかいや〳〵〳〵若し平家に失はれて何の言譯とはいへ若し此身ばかりが庄司様に御目に懸つた時女は何と問はれし時平家を恐れて落させましたと有ては若し言譯が立つにもせよ行衛見果ぬ一人旅夫れ見果ずにといふてのめ〳〵逢はれうか戀しいと思ふ心に魔がさしたかオオさしたさしました庄司様戀しうなうて何とせう斯る住居に日を暮らすも御歸りの顔が見たいため其ればかりずや其ればかりに姫君を追ひ出したか戀しい殿が今にも戻て來給ひて居らぬは何故と問れたらサア何と答へて濟む可きか遠くはあるまじ姫君の後追ひかけて二人連立て福原へ行かう尋ねてはくな此處住除くなと堅い仰其に背てやみ〳〵網張て待つ福原へ往かうとはサア是もエヽ叶はぬ憂き世此魂を二つに分け一は東へ一は西へ東へ往た魂は逢たかつて來ぬした西へ行く魂は御袖の裏へ御供して

ト脱き捨たる橘の衣裳の袖に手を入れ

あら此紙は何手筒か戀しの我子橘御命の隙の庄司より西方淨土千鳥を供にてはや熱き汗を拭ひ病の床に打ち伏し今は最後も近付き殘念や扨は姫君悲しや欺かれしか口惜しや是は何事天も地もないか鬼がみいれたかいかで後れん後るべき是喃待て給べ餘り急くと御足が痛む徐々歩いて追付てもの申さん如何に夫なる男の旅人待ちやといふに

折戸の外まで驅け出でてものに躓きて絶倒す程なく上手より百姓三人夫々に拵へて登場

百姓一　是はとんと日が暮れかけた

百姓二　ヤイ久田の作われが兄じやの家へ入込んだ初對面の嫁御寮暗雲に口が大いありやどうじや

百姓一　ありやあれよ其の生れた儘の口よ

百姓三　とこれ仲人殿の庄屋殿の官平殿の配遇殿の舅殿の兀殿の親父殿がいやつたか

百姓二　ハヽヽヽヽ

百姓一　大い口な

三人行懸て前に立たる一人千鳥の仆れたるに行當る

百姓三　エイ人が死んだきやあ狐じや

百姓二　何じや今のは

百姓一　これよ(手を額に眞似て見せる)

百姓二　狐か人か

百姓三　きつの人らしい

百姓二　行かずばなるまい

百姓一　恐しいがヤア行こサ

二人行かゝる

百姓三　コーン

狐の聲を眞似る二人は驚愕する

ムク〳〵と起き出すはそれ尻尾が

百姓一　イヤ〳〵恐しい

百姓二　人じや人じや狐きつ(きつといひて動かす)身體が暖い人女じやきつか

百姓三　コーン

百姓一　南無阿彌

百姓二　エヽ是りや人じや生て居る病の女じや

百姓三　生て居る人の病の女か

百姓二　是來て見よ寄て來いなァ口も有鼻も有狐ではない

百姓一　宛然人間じや

千鳥　コーン

二人　キヤア

と驚て逃出す模樣よろしく退場

千鳥　もの程もない平家の逮捕消るが如くに逃去たるか拔合せる刄の先に迸る血潮腥く此腕にかけ殺せし上ははや氣遣もなし敵をとらんと數多の軍勢再び押寄せ來らぬ間に今往くはいの庄司樣忍び〳〵の心の裏かく本領安堵なる上は人にも今日から妻と呼ばそうイヽエ明日から昔の契ホヽ忘れては居ませぬものをあれ繼母はいやじやといふて女君が逃げて行くイヽエ成らぬ袖引て止めてやらうやらぬといふに是

第三場　福原御館一間の場

本舞臺一面の平舞臺繪襖を以てしきる簾あり遣戸あり都て福原御館奥殿一室の趣を作る

侍女松風其他三人登場

女一　是々松王樣に逢ふたかへ

松風　其を其方が入らぬ事

女一　いらぬ事では濟まぬはいのちと仲人口に入れて置きたい

女二　して何と談しやつた

女三　サァそれ聽かう

松風　さればとよ近年諸國に人種が切れる是によりて普く天下に御觸有て此後もし男子を生む者あらば荒布の忍ぶ摺蘆の笛一管に副へて給りまつた女子を生む者には唐織の綾一卷玉の輿に添て下し賜はるといの

女二　其でわかつた石女は皆此御館に御奉公をせいとの心松王はそれ觸れに行かせました

松風　それ何故に

女二　ハテ恐しいは人の娼嫉其方や此方の腹から滅多な種が湧て出たら此髪切て尼に成らねば事が治まらぬ

女三　エヽこれ氣味の悪い事いふまい

女二　昨夕の醉が醒めるかへいふた許では出來事所詮其方の戀は叶はぬ其より一寸京へ歸て世の中が見て來たい

女一　其方が落して置たのはもう年は幾歳ぞへ

女二　知つた顔してもらふまい

東の侍從登場

是は侍從さま此頃はよいふ日和で御座りまするそれに貴女は蔭にばッかり

女一　何ぞ今宵は御催が

女三　秋といへば淋しいもの

侍從　オヽちと思ひ寄る事もある其は後ちと松かぜに尋ねたい事があ

る其方三人は皆あちらへ

女一二三皆退場

是松風何故にはやう、して松王に逢ふたかもの言やつたか

されば泉水の向ふの廊下の蔭に居りました

松かぜ　松王と見てものかげに招きよせ

侍從　いヽに童を呼んでものとらして

松かぜ　早う逢うた處を言やい

侍從　逢うた所は御門の外の

松風　松王が何といふたか其れを

早ういうて仕舞ては儂の功が見にませぬ御池の鯉を掬網て捉るやうに混ぜて見たりすかして見たり遠い所から種々に廻して行て寄せて行て先ゴ我君樣の御吩咐何と思うて承つたと問ひかけたら婦女の知て用ない事用ないとは何事罪が有るの科があるの詮義があるのとァヽ馬鹿らしい女子に咎はない世の中女に嘘を

いふは二世迄の罪誠を明せと責めかくれば松王どのは分らぬ顔
召連れ來よとの仰なれば迷惑ながら行くといふハテ耳寄な其詞
迷惑とは何故迷惑問はれて忽ち迷惑顔

侍従　いらぬ言葉爭ひ

松風　いゝは是が思はぬ端となつて聞けば此度の御使どうやら進まぬ
けしき愈〻探ぐればはしたないは男子の心以前より其者の方へ
通ひ居たる樣子

侍従　あの松王が其者にな

松風　侍従さま御合點が惡い去れぱこそ御月見の夜に須磨あたりから
其女子が御船のあとを付けて公達に對し後言をいひしも男にあ
とを尾はせん巧み

侍従　と松王が言やつたか

松かぜ　言うたのやら言はぬのやら其處は貴女も御推量大方こんな事で
あらうと存じ焚き付けましたはあれや罪科や詮義の故ではなし

入道樣が音羽山耳からはいつた色好みなんぼうの御主人でも是
は格別沙汰過ぎる其方が先に眞帆ならぱ櫓櫂も及ばぬ入道さま
どうぞ其處から連れて行くなり逃がすなり此方へは足向けさし
て給るなとかう言ひましたな

侍従　して松王が返事はな

松風　畏まつたと言うた顔のあはれさやら憎らしさやらというては道
具が足らぬでァ聞て下さりませ其は誰からの賴みかと問はれた
時此方樣といふ聲が喉から一寸覗かうとしたのをグイと飲み下
し袖を拂て威儀を正し思ふても御覽ぜよ古より國の紊れのため
し遠く異朝を訪ふに

侍従　其れ聽たうはないその終りは

松かぜ　左樣な者有ては御内の愁天が下の女子の怨引ては遂に國の騷亂
又其方の仇でもない儂風情の嘆きとこんな言を出るに任かせて
虛實御吩咐の外ながら人の戀迄讀んで來ました上の句はもし其

女子ではないにせよあの方角へ通ひ居つたは定

侍從　其より未だ吩附た事其者必らず連れて來まいと誓を立てたか

松風　福原へ來て海見てもどるやうなもの其れ言はさいで何歸りませ

う

侍從　其きいて心がはるけた思ひしよりは容易くて喃

松かぜ　それ事を摘んで申すと容易くてと仰やるは

侍從　いゝやそうない徵には

松風　どんな男に添はして下さります

宗盛基盛登場

基盛　迚も成らぬ戀ならば如かず速に心を移さんには

宗盛　愁を移すとこそいはめ其は誠の戀ならず

侍從　誰やら人の影がさす

退場

宗盛　これ松風今朝鶯を聽やつたか

松風　數ならぬ身は其やうな人來〳〵に氣遣は御座りませぬ

基盛　顯はれたを知らずに辨解する程現在傍に居る戀人に聽きづらひ

事はないは

松風　其の筭にはかゝりませぬ

女四人登場一人の女長き釣竿に糸の端に鯛の附きたるを持つ

女一　もう離してやるがよかろう

女二　是もうよい、程持つた此度は儂に貸して給も

女三　鱗が剝てはならぬ程に

女四　いえさかまはぬ鱗が剝げたら金箔をなと置かう

宗盛　釣つた

基盛　釣つたは〳〵

と走り寄て鯛を押へる女二釣竿に手をかけて引く釣糸鈎と

共に魚の口を離れ拍子よく宗盛の頭髪にかゝる

宗盛　これ毛を引ては痛たいはェ　幕

第三段

第一場　生田の小野の關所前構の場

本舞臺は一面の平舞臺にて正面中程に白木の關門扉なしに構へ之に取附けて上手より下手に掛て白木又は黑木の柵見得嚴重に設け奥の方板屋にて關所を見せ左右木深く立樹あり書割には遠く近く山々連疊の景色を描き柵の内には諸道具恰好の配置若くは内側より幕を張るもよし門の構造は極めて宏大なるを佳とす都是生田の小野の關所前面の構にて花道よき所逃走たる旅人の荷物委棄散亂たる有樣

役一　あのやうな美しい若い男子を人柱にするといふは可愛そうなといふやうなものじやのゥ

役二　サァ其人柱といふ物が何に立せる物やら我はどうもまた腹に落ちぬは

役三　三十三間堂の棟木の阿柳といふ談がある先づ其やうな物じやといふは

役二　其のそのやうな者がわからぬ

役四　扨々どちらもこちらも物を知らぬ男じや我が言て聽かさうよく聽けよたとへば旅人の三人四人連れ立て人も通らぬ山奥をわけ入る右も左も松杉の大木しん〳〵と生ひ茂り奥は暗唯幽かに木の葉の隙を日の影が見える此やうな山の中三人四人連れ立て行くと遙かに上の峰の方に當つてゥーオーゥーオーといふ聲あれ何じやあれ何じや狼ではないか狼じやゥーオーあれ何じや狼かゥーオー愈々聲が近うなる狼々これはたまらんと皆逃げ出すゥーオーそれ狼が出た後から追ひ懸るはかう成たら仕方があるまいがのう其處で先づちと無慈悲のやうなれど一人は二人に替へられぬに因て連の中で一番弱さうな男を一人が打倒すキャット

いふた儘倒れる倒して置て皆逃げるウーオと狼が後を追ふて來
るけれども夫れ今一人の男を倒して狼の餌食に置てあるから狼
も不性者じやによつて先づ手近にいゝや足近に口近にころげて
居る人に目を着ける赤い舌を出してベロ〳〵と頭から手から足
から啖ひ出すサ此啖うて居る其間が命じや他の者は其暇に逃げ
るトマアかういふ次第人柱も此通じや海の底と言ふたら暗いは
暗いは其暗い海の底に何とも知れぬ妖怪が棲み居てな夫が人を
餌食にして居る人柱といふ者は其に啖はす人の餌食じや海の中
へ人を投げてやると其妖怪がこれを啖て居る其間に海の底へ石
を入れて島の根を築く事じや去れば此春の時も我が隣の村の者
に一人つい海へ落ちて此妖怪に取られたはの

役二　ム、其妖怪が人啖うか

役三　恐しや〳〵

役四　其れで夜になると妖怪が人を嚙みこなす齒の音がそれは〳〵凄

まじい音に聽える現在此春我が隣村の者が捉られた時の其夜
潮颯が吹くに連れて此聲を聽たは我が一つ村の者じや

役一　何やら聲がしたと聞たはム其れか

役二　其では今程のあの若い人が其妖怪に啖はれるのか

役三　海の底で

役四　聽ても凄いは此春の事其妖怪に人がとられた次の日の明方頃海
の下五尺程の處にところ〳〵とした血の塊がな海鏡のやうにふは
り〳〵三つも四つも淡路の方へ流れて往たそうじや

役二　恐しや其の啖はれる時の心地は何と有らう

役四　大方章魚のやうな手がぬる〳〵と咽元をしめるで有らう

役三　いゝや爪で胸の邊から引裂て啖うであらう

役二　エヽ

役四　是々今ふのれが啖れるではなし今の旅人を捕へたに由つて先づ
此役も濟んだやうなもの村の者でもがもしは捉られはせまいか

と思へば今迄は胸がどく〳〵して居つたが是上はもう眷族に祟りはないなこれ庄六

役一　先づ安心じやと

皆　いうてよいやうな者じやな

一同退場

松王登場

松王　目に視るにつけ耳に聽くにつけ今や此世は終の形勢天地山嶽鳴動して星亂れ飛び雲墮ちかゝる烏羽玉の闇の中に毒氣地の底より湧き騰て人間世界は破滅を爲す可し覆らんか震き毀れんか斯る汚濁にあらんよりは速に碎去らんには如かず淺ましや月日の下に横る此の世界は一個の大いなる屍骸にして地の上に蠢く一切の衆生は此屍骸の腐れ爛れたる中より涌出たる蛆なるか眼を遮り耳を掠めて去る者は死滅の鬼の影さすか今走り行きし一連の旅人顔に色なく目に色を見ず修羅の衢を叫喚の光景我はそも

何しに是迄は來りたる厭ひ果たる染濁の世を捨んが爲に家を出でながら猶中空に漂ふぢや榮華は幻忠義は夢戀は迷ひ迷ひし足の踏み所何處に向て着く可きか一歩先は未來なるに思慮なくて踏まるべきか哀れ思へば松王は氏なき生れ幼に父にも母にも別れはつかなる面影にも心に殘るかたみはなく十歳にも足らぬ内より平家へ御奉公惟くも御一門の繁昌を親達一族の榮華の如くに觀て喜びしは嵐のためし未だ知らぬ舟子共月を包て輝めく惟し雲を美しやとて眺むるに異ならず身に餘たる君の惠嗚呼つらし是を惠かゝる惠を受けたりしは心に負ひて苦しき重荷山谷越えて世を隔て憂き事聽ぬ里有りとも身は離れぬ心なるに墨の衣に身を包みても何かせん我と我身を刺して死なんか死骸を何處にか藏すべき足は地を離れねは蛆虫に生を替へんのみ我と我身に纏束らるゝ人間未來の分別所詮あかきにあがくとも切らでやむべきこの羈絆嗚呼死死死ぬる事こそ人間が運命の手に渡す

最後の引出物取れよ渡さん此命山の奥なる狼は此松王が身體でも喉いたいか劍に伏して我手に死なんは猶身にくゝらるゝ弱味有りいざや行かむ此道の果つる迄月夜ばかりに見し面影は今行く先の道案内(しるべ)唯是天地晦冥の中に一點の燈火世を吹きまわす嵐には其だに今や消えんとす思へば戀は心の闇の暗らきに連れて光を增す燈火に似たり消えんとしては又燃え立つはわら悲しや詮議の爲に召し取るとは詐の君命楊家の女末遂に溝濱に入て無殘の最後

道端に散亂したる旅人の捨荷を屹と見て

役人　あら厭はしき穢土の狀やな

門裏に物音して橘以前の男裝太刀を振て奥より出づれは關

同　所の司妹尾三郎其他役人多勢追ひ掛て登場

役人　(内に)逃げる〳〵

同　狼籍

同　遣るな

三郎　是りやならぬ不屈千萬

橘の太刀を打落して難なく捉へ

ム、恐れを知らぬ手出し逃がせは身共の一大事じや最早逃がす事ではない者共是牽け逃がしてはならぬゞ

役人等　心得ました

橘　神も佛も救ければないか

大勢の者橘を引立て奥に入る

三郎　あら珍しや思はぬ處で松王どの

松王　騷がしき今の物音あれは何事にて御座る

三郎　取り置たる人柱の者狼籍を致して御座るは

松王　何人柱とな今此處迄來る途すがら人柱とか關所とか左樣の事を言ひ罵るを耳には聽しが是は寔に關所の躰其方は妹尾三郎ぬし爰は生田の小野あたり何とした儀で御座るか

三郎　されば〳〵御聽めされ此春彌生の下旬より前阿波民部大輔奉行として造營有し築島此程の南風白浪を逆捲上げ一夜の内に崩れたる天變既に再度に及ぶ此上は成就覺束なし如何ある可くやと

て陰陽の博士阿倍の泰氏を召て問ひ給ふに泰氏天文地理の妙術を以て暫らく考へ申けるは此島通例にして成り難し人柱を御入有て築かしめ給ひなば成就せんずと也其に依て新に此處に關を据ゑられ往來の旅人を擇び搦め捕れとの御掟乃ち妹尾三郎關の司を仰付られて御座るに依て今日唯今の程に旅人を一人召取て御座る扨々大事の御役先づ八分九分相濟み先づ安心致した

松王　(白旁)天は許すか此非道を——して其捉られし者は

フト目に著きて落たる印籠を拾ひ上げ

三郎　西國より出たる旅人

松王　今拾ひたる此印籠は

三郎　萩桔梗女郎花其許が持たれたるのに似た蒔繪正しく今の旅人が

持ち居て落した品で御座らう

松王　三郎殿に御願申す其旅人に某を逢はして下さらぬか

三郎　安き程の御事見られても苦しかるまじ是よりどの方へ行かるゝか御急の旅でも有るまい先づ内へ御茶ひとつきこしめされ

松王　先づ御座れ

三郎　から來させられい

松王　(旁白)地獄の門か忌々しき此關

兩人退場

第四場　同關所内部の場

本舞臺前側に僅なる餘地を存して少しく上手に寄せ椽の設はなき五間程の二重藁葺の庇を附け床は板張正面見附も同じく板張にて上手に入口を明け左右には華美ならぬ紋形を置たる麻布を縫たる簾麻の總を飾りたるを懸け下し下手には松柏の梢軒を藏て生ひ茂り立樹の隙よりは少し奥の方に藁葺の四つ堂の片側を

見せ景色何となく物凄き趣都て生田の小野の關所内部にある一室の躰なり

此に以前の役人待三人橘を捉へて登場

橘　扨は此身に御疑ぼし有ての故ならず

役人侍一　オヽサ如何にも其人柱と申すは神に供養の尊き役目

侍二　目出度事で御座るは

侍三　もう逃ぐる事は問てもなるまい斯く成たる上からは覺悟殊勝に有らんこそ大切なれ是方々

侍一二　左樣で御座る

橘　神に供養の人柱此身を海に沈めんとな

侍一　兵庫の港に島築の人柱海でがな御座らう

橘　(旁白)迚も逭れぬ父上樣いとし其方の一人子は是迄は來ましたず

や嗚呼人間に形骸といふ物ないならば吹く風となつて此籠の隙よりも逃げんものを叶はぬか成らぬか

喃人々

侍三　何事ぞ

橘　迚も御宥はなきか

侍三　エヽ又其を煩き問言

侍二　最早七六殿さう叱かられな是旅人念佛一遍に覺悟致されたが肝心

侍一　先程も申せし如く老耄負戴の者若くは出家法躰の者或は生付たる片輪其等には御搆なし宥さるべき者ならば止は致さぬ

侍二　既に留められし上からは假令其許が斯くいふ某の身内であるとも假染ならぬ人身供養逃したうても逃されぬは

侍一　死ぬるは誰も厭ふが習ひこれ三八殿無理では御座らぬな

橘　(旁白)死ぬるを厭ふ身ならばこそ此處を出ずては父上の御聲を耳に聽くやうな早う逃げよ命有る間に唯一目アイというてどの隙から

侍三　もはや程なくわれへ入れられるであらうか

侍一　去れば妹尾殿が御指圖ありそうなもの是三人殿どうやら諦めた
樣子で御座るな

役夫三人下手の樹間より登場

役一　(低語)何時の間にやらチャンと鎭まつた

役二　(同)是に居るのか何處かを斬られたか唸る聲は聽えたか

役三　(同)生て居るかも知れぬ此から覗け

簾の外より覗く

エ凄や〳〵斬られもせぬ其儘生ては居るがはや妖怪が魅いれた

役一　(覗く)(低語)身體が蛇のやうに動くは

役二　(覗く)ヤー

と叫て三人下手に駈け入て退場

幕　あれ〳〵〳〵空から墮て來る鳥か鷲か此身體を引捕へて颯と空
に捲き上げる颯と擧てはどうとオヽサ岩根の松陰に沖津白浪と

うと寄せ來る大浪小浪浪の皷か打連れて笛を吹く水の月影かげ
ろふの有るか無きかの俤オヽ先づ船を下り立ちて萩の白露亂れ
し黑髪つげの小櫛もさヽで羞かしき我影

侍三　こりや此者は狂氣致した方々御逃しなさるな

退場

侍一　是旅人靜かに〳〵

幕　賤が伏家の垣根にさく花はオヽそれ萩に桔梗に女郎花萩には露
の白銀か星の如くに輝めきて黃金の花は女郎花其曉か

三郎松王二人下手の樹陰より登場簾の外に彳て窺ふ以前の
侍上手の入口より登場

其曉を忘られぬ戀の重荷をそれと渡して其儘跡もなく地獄から
來た使か苦しき悲嘆を手に渡したはエ思ふまい〳〵其俤も思ふ
なよ名乘らず告げぬ其俤も思ふなよ此處を住棄て立去れとは

松王三郎簾を揭て內に入る

悲しや助けて

松王　喃是旅人さのみな物に狂はれそ武夫も戀には亂るゝ心(旁白)世の形勢のうたてきは皆是狂氣の沙汰嘆く可きも怒るべきには非ずかゝる目を一時も觀るに忍びんや

三郎　是三郎殿狂人として人柱は叶ふまじ求め給はゞ此代必ず遠にあらず此者ははや〳〵放ち遣はされよ

松王　されば如何やうに計らふべき者で御座らうか

三郎　神に汚れの畏ある人柱狂人が叶ふべきや疾く放遣て然るべし但し後日に到て御咎有らば松王某誓て身に受けるで御座らう

侍三　しかと左樣ならば此人々を證據に

松王　(進み出で)某三人を證據に

侍三人　如何にも是にかけて是旅人早く立たれよ

三郎　是狂人

盛國　往けといふに

盛國　此の以前より盛國登場入口に彳立て窺ふ

盛國　怨か〳〵先程よりの此者が振舞某蔭に忍び居て其聲をきくに調子亂れぬ言語の響又宥さるべしと聽て遽に泣く聲の變りし情態

橘　是狂人の悲に非ず

盛國　顯はれたるか上邊のよそほひ

盛國　如何で左樣の謀策に乘らうや狂人なれば宥さるべきかと人を伴はる振舞

橘　あら不運是でも何故に心が狂はぬ

盛國　して松王其許には何しに是迄參られたるぞ

松王　竊に存ずる旨有て此處を通行する旅人で御座る

盛國　然らば御身に差合はなし如何に三郎殿既に此者を召取たる上は往來の難義明日より此關は引拂はん扨某は是より直に馳せ歸り御用に立つ可き者召取たる由言上致さん豫ての定手筈有る通夜陰に忍で此者を其儀は先刻承知ある筈某今より參りし跡假令如

何なる事あらんとも此者を放つなんと言語同斷逃さぬやうにゆめゆめ油斷はあらるゝな

三郎　三郎逐一承て御座る

盛國　はやあれへ押入れ置かれよ

三郎　畏まつた

盛國退場

いやちと聽て置く事が有つた

退場

侍三人　ても扨も巧んだなア

松王　（旁白）恠しむ可からず何事も巧の中に謀策有る現世の習非禮は禮を巧み無道は道理を巧み不仁は仁義を巧む婦女（なんな）は操を巧み武士は勇氣を巧み出家は高德を巧み旅人は富貴を巧む朝には夕を巧み外に出ては内を巧む惡魔の巧みし淨土か此世は

橘　許して下され父上樣もう此上は六波羅へ往て逢はうより他に詮なき此成行唯其迄の御命神や佛も在る世なり逢はれぬ人にも遭はれる者を出遇ふ事々何もかも思も寄らぬ世の定め思ふまいエゝもう知らぬ

侍三　是人々耻かしき身の上の戀がたり語て聽かさう聽て給れ

侍一二　狂氣は止めて戀の沙汰

橘　是や聞ても面白からう

扨も此程西國より此方に上る道の事見初めし處は明石の浦時しも秋の最中にて陸も遍き月明濱手の方の松蔭に數多群れ居る蜑子共此世の海に何事を漁る人かと立寄り見れば蘆間を漏れ來る月影に穴をうかれて出た蟹を皆々捉へて縛らうとする數多人あるは其中に心異る人一人此蟹を他の手よりもぎ取て其儘放て遣たるは是聊の業と其方達の顏には嘲て見え給へども蟹の身に成て如何ばかり嬉しからうず其夜宿に歸てから其人が夢に見にた光を韜む人心眩きやうに思はれて浮き立つ心にあてどもなく物問

ひかはすも短かき隙人は情の有ながらつれなう見棄て歸る姿は
水の月繋ぎもならず止められず止めもせぬに殘りしは心が心に
教へし俤夜は愈清けく見ゆれば若し今にも尋ねて來るかと嗚呼
待つとは言はじ日頃は人も尋ねぬ宿に音訪れ來しは京の使の悲
しき便親族(うから)ども便りとも唯だ一人の父上今はと迫りし病の床に
逢ひたい此世の思ひ出に我子の顏を見たいとは夢にも告げぬ運
命の試しものになる事か思ひにすくむ足蹈しめて心は空に是迄
の旅

侍三　どうやら狂氣めいた物語で御座るな

侍三　狂氣のやうな悲しいやうな

侍一　慘い樣な逃げたいやうな心細いやうな

橋　命危き父上の今生の對面と有るを行かずに居られず來たればこ
そ思はぬ空の邂逅廻り遇うて親と子が此世の別濟せし上は最早
用なき此命其時に棄迷はんよりかうと定まるも憂き身の宿世唯

此上の御情には親に逢はせて給るやう御慈悲を願ひ奉る親とい
ふ者ないならば此上辱を見やうより此目を直に瞑りたいに

松王　かよわき身にて有ながら殊勝なりいじらしき志(旁白)愧入つたる
松王が今迄の心懸不忠不義愚痴妄執惡魔外道が魅入りしか人こ
そ知らぬ人にこそ見にざれ我と我身を見る程に醜く汚穢き者が
又とあらうか其れとは知らん由もなければ此松王を戀たるか戀
はれたるか女と云者は淺墓にて明日の男を知らずに賴む畢竟戀
心申さん言葉更になし
是旅人親子再會の便賴なきには非ず必ず心を落し給ふな

内にて　松王殿〳〵此方へ〳〵

松王　喃旅人生命は人の寶ぞや

退場

侍一　して其方が思ひを懸けた蜑の乙女には

侍三　其後再び遇ひはせぬのか

侍二　逢うたか

侍一　イヤこれ

一同　泣かれな

皆々寄て慰めもてなす事よろしく幕

第四段

第一場　同籠室の場

本舞臺中程には藁葺の四ッ堂黒木建にて少し高足黒木の粗造なる欄干を三方に折り附け前に簾を下し階段を設く此家臺の上手には打橋だつものに續けて別に藁葺の庇を少し奥の方に見せ下手には松杉等の立樹有る庭を隔て下に黒木の柵を搆へ好き所に鑰鎖したる門有家臺の前庭には焚棄たる篝火餘燼ほろ〳〵と燃え四邊もの暗く簾の裡より燈火の光僅かに漏る都て關所内にある籠室の夜景なり

此に橘獨り籠室の簾の裏に在

喃父上樣思ひやるのは眼前見るには及ばぬ定めて御介抱をする人もなき病の床に今か〳〵と此身を待ち給ふ御心此胸の裡の苦しみと孰れぞや假令逢はれる事有りとも繩を纒ふた此姿でそも や御目に懸れうか末期を紊す御嘆き未來迄もの御迷迚も追れぬ契と思召し此身に逢はす目を瞑て下さりませ六道の衢にて親子が廻り逢ふたならもう再びとは離れまい

松王下手より登場門を開きて籠室の邊に窺ひむ

子を憧れの親心臨終の際迄待ち悶にて嘸や御無念御殘念待つといふ程世の中に果敢なき事がまたと有らうか待ち得た時の悲嘆は待ちし心を怨むぞへ逢はずに死んで下されとは空恐しき事ながら親に死ねとの不孝の罰は海の底に身を沈め藻屑の中に髪を亂して魚の餌食となるわいなお前の子ぢやもの父上樣神や佛に力を添へ最後の苦患を救けて給べ斯と定まる上からはもう此上

の愁嘆は有らじつらき別離をして來つる千鳥は何と今頃は獨明石の浦風にも親子が親子二人共かゝる最期をせうぞとは夢にも聽て給るまい

松王　(旁白)嗚呼我が涙かゝる情には泣くか渇したる旅人も水清冽にして掬ぶに堪へす嗚呼戀か如何で戀ふるに耐にらるべきなどか左樣に棄果てん生命は人の寶なるに

橘　聽かじとすれども耳に囁く聲あれ鳴く虫も聲をやめしは

松王徐に進で籠室の簾を切て下せば燈を傍に橘束縛られたる儘座居る態なり松王無言にて繩を切る

松王　是は何の御情で御座りまする

親御は嘸や待居給はん關守は皆醉伏たる此隙いざさらば父子今生の御對面速に此處を落行かれよ

橘　落行くとは思もよらす許す泣けとの御慈悲か

松王　猶豫らふへきかは御身此に在て用なし此松王が行かれと申すに

いゝや落ちませぬ往きませぬぞや心にしみて嬉しき御情どうして仇で報いませう假令其方が平家御一人の棟梁で此を逃がすと仰有ても御恩は此世で返す事のならぬ此身の上未來迄も忘られぬ御志難有う御座りまする甘えがましき事ながら汚れに染まぬ乙女が今生の御願最期に迫る一人の親にかう〳〵成つた女の身の上いや樣子有て此世では逢れぬ故後世を賴に諦めてと親の命の有る間に往て言傳て給らぬか松王樣御願申上げまする此世の重荷是ばかり應と答へて下さらば終念の亂もなし此御恩にさへ何で何で報ん事も叶はぬか心に泉む涙川源頭(みなもと)は目に見にすとも神や佛は御照覽身は牽かれても心は止る止る心は松王樣衣の裏の珠ならば珠はそなたに運は天に身は海底に棄つるとも後に名殘はさら〳〵なし御慈悲御慈悲松王樣親を見に往て給はるか

橘　愚なり愚痴なり夢と見てか何の讃言

松王　橘を脇に抱て庭に下り門の邊に橘を卸す

急いでとこそ

橘　嬉しい程に悲しき身の上今の間にはやう死にたい行たうはない

松王様

松王　(旁白)亂るゝ心よ暫く沈め

是思て御覽ぜよ親の子を思ふそもどれ程であらうず況て病の床に風の前の燈御身人間にて有ながらもどかしや人倫の道を知らぬか今此の機を逃しては子の罪墮地獄(繩を以て橘を打つ)あの松繩手左にとつて行けば京への道一歩の猶豫は親御の一息

橘を門外につきやつて門を閉づ

橘　寄りもならぬか

松王錠をふろす其音ビーンと響く

松王　早く親御へ戀人さらば

引返して家臺の段階に腰をかく

橘　御情餘て怨めしい跡に殘て何となる御心ず申し惡(にく)い事ながら連れて逃げては給らぬか如何ならん山の奥も月日といふ知邊はある人間の故郷往て住まうとは思はずか蜑の子なれば其は厭とか人の御情を恨み申すは愚痴思へば女の罪深し一息づゝの御命淨土へ親を往生の引導は此身の役親に逢はすの御情難有や勿體なや唯拜みます松王様聽かした時の親の喜び親に代て御禮申上まする少しも早う其御顏を父上逢に行ますずや

退場此以前より廿日はかりの片われ月少し曇りたる仕掛にて立樹の上に見えたり松王欄干に立上りて見送る模樣ありて

松王　松王が此胸は鐵甲愚痴の刄は切ても徹さずオヽさりながら今の言葉を聽く苦張裂くばかりに滿來る涙を耐に怨びたるつらさには骨も碎くるかばりずやもはや此世に何事を苦しとせんはた何を悲むべき此身の願は今果しつ此嬉さに替へん實はなき世なり自から解て自から縛る解くも縛るも心の儘

縄を以て自ら縛り以前の橋が居たる座になほる少焉妹尾三郎登場上手の家臺より

三郎　大事の々々の御役目まだ濟まぬ中なるに下郎迄を寐さしたは是や身共が違うた其故滅多叱りもならぬやうなもの去り乍ら鳥渡起して叱て遣ふか何と叱たもので有らうか先づ鳥渡覗いて置かう其方が叱り具合がよいやうなものぢやゃ夥しき虫の聲眠たそうな庭の景色ぢや虫が鳴くのは豐年の徵とかいふ

上手の簾を揭て内を覗て愕然

ゃ松王どのか是やなんとどうした

松王　靜かに〳〵其聲高し彼者は子細有て此松王がはや疾く逃がしましたぞよ

三郎　逃がしたかのれ逃したとは何なに何處へ逃げた

松王　是靜かに彼者を逃しては三郎殿御身に御咎有らんは必定イヤサ御身が一期の浮沈で御座らう

三郎　悲しや松王日頃親しき此三郎に何の恨有てか憎き振舞サア命にかけて勝負々々

太刀を拔て翳す

松王　其聲高し何で御身に恨を存せん去り乍ら仔細有て某助けねばならぬ彼の者より逃しは致せしが御身の上に御咎めはゆめ〳〵羅らぬやうに某がよき謀らひ心を沈めよう聽かれよ

三郎　其は本氣の沙汰かよもや狂氣では有るまい何の恨か意恨か意趣か但し魔が付たかどう有ても憎き曲者

松王　如何にも御身に取ては曲者とも思はれん去ながら御身に祟りは決して御座らぬこれ聽かれよ彼の人柱に召取たる者の顏を常に見張て居れよとは盛國も申しは致さぬ全く御身は知ぬ顏にもてなし最早時刻乘物を是へ寄せ矢張先程の旅人の躰にて某を其乘物に乘せられよ彼方へ參たる上は人柱の事關の司の與かる所に非ず某は人の難義に代り願て人柱になりたき望其場に申開く詞

も有松王嘗て誓を破らず御身へ御咎決してなき爲には某水を濺ぎて篝火を消し暗きに混れて竊に囚人を逃したる由をいはゞ某にこそ御咎はあるべけれ罪なき御身に何の祟かあらん若斯く申す松王が言葉を聽入れなく其方より音立てられては咎を追るゝ術は御座るまい今より追手をかけらるゝとも盛國につかひし詞の間に合はずば責は御身に迫れ難し唯某を知らぬ顔にて出されたが頂上知らぬで通るは安き事是れ程申して分りましたか

三郎　其方も今言はれ通にいうて給はるか

松王　いふにや及ぶ疑はるゝな年頃内外なき御親切爭で仇を以て報ゆべき某人柱と成て海底に沈まば之をだに切てかたみと御覽下されれ

太刀を把て三郎の前に置く三郎そうなくは取らず

三郎　水を濺で篝火消し暗きにまぎれて囚人を盗み出し確と左樣に言はるゝか

松王　もとより

三郎拔きたる太刀を納め松王が與へたるを手に下げ段階を下りて家臺の後邊の泉より柄杓に水を汲で篝の上に撒き槍杓は其處に捨て門を一檢して又もとに歸り

三郎　何處より逃したるか

松王　猶未だ御渡し申者有

ト鑰をとり出して與ふ

若し某が今申せしを御差有らば御身の破滅何事も某に任されて氣遣有らるゝな

三郎　(旁白)アヽ胸がぞく〳〵何とやら腹の底が痛む

松王　是暫く某を縛しめて往かれずや

三郎立戻て松王を縛め

三郎　(旁白)アヽアヽ腹が痛いヤ太刀を忘れた

振返て太刀を手にとり之を抱へて退場上手へ入る

松王　とはいふものゝ若しや御咎有たらば嗚呼三郎其方も親はなき身なり忍で給れ是迄の友垣

燈を吹消す程なく下手奥の方より役夫多人數乘物を擔ひ一人は松明を持ちたるを引き妹尾三郎登場

三郎　こら〳〵其方は此處に立居らう

松明持たる一人を樹陰に止め置き

是丹五吉六其の乘物をあの前へ据ゑて參れ

二人　畏りました(よろしく据ゑて)据て參て御座りまする

三郎　權七其方あれへ參りあれへ乘れと聲を懸て參れ

權七　畏りました(ト進み行きて)乘物へ乘られい(ト戻る)松王下て乘物に乘る

三郎　庄八屹と見屆て參れ

庄八　へゝ

ト迷惑なる顏にて恐る〳〵進出て乘物を覗き

居りまるやうに御座りまする

三郎　然らば皆の者共あれを擔き上げイ

是にて一同進寄て乘物を擔ぎ上げ奥へ入る

エゝまア寒い月の顏ぢやな

此見得思ひ入れ一寸有て幕若くは道具廻る

第二場　福原邸中の一室の場

本舞臺は一面の平舞臺にして正面は上段を設け三方には紋形の唐紙襖此處都て福原邸中の一室

此に入道淨海重衡業盛及侍二人列坐にて幕開く

淨海　此曉に其者を引連れ來たると申すか

侍一　如何にも乘物を以て運び參たる樣子に御座りまする

經俊登場

經俊　未だ此邊には知り給はぬか福原といふ處有て以來イヤ今此足が蹈む床の下が土なりし以來空に日の照らぬ日は有るとも斯る椿

事は例あるまじ今某が申さん事を驚愕の虫が騒がぬやう胸を押へて御聽あれ島築の人柱にせんとて搦め取て來たりし者を如何なる旅人とか思召す此曉に乘物を以て擔ぎ越したる人柱を某盛國の傍に在て輿を出たる其人を見れば其旅人を見れば

淨海　其者に鼻が二個有しか但しは口が三個有りしか

經俊　いや鼻も一つ口も一つ然も其一つの口かく申す經俊と一つ酒瓶の酒を酌しは今より三日以前なりし然も一つ此館にて一つ惣の下一つ筵の上聽給へ其松王が身に繩を纏うて

重衡　何松王が

經俊　オヽ鼻も一つ口も一つよく〳〵其言ふ詞を聽くに變化魍魎の類にも有らぬ正眞の松王

淨海　妹尾三郎か護り來る輿の裡に松王が有るべき謂はれはなし怪しやな子細ぞ有らん

盛國　(奥の外にて)其仔細言上申さん

盛國登場

淨海　是や盛國松王を捉へしとは寔か彼は申含めし條有て主命に使する者旅客を以て見るべきに非ず之を捕しは此入道に繩をうたるに異ならずサ言譯や有る何と申すぞ

盛國　恐れながら盛國松王を捉は仕らず

淨海　左も有るべし松王を捕へしとは何の間違を申したるぞ

經俊　松王が松王に間違有らば此目くり扳給ふて間違御座らぬな是盛國

盛國　ハッ思はぬ椿事扨も昨日の夕間暮生田の關に召取しは西國方の年は十六可りの若者親を尋ねて都へ上る者の由申屢逭れんとして刄を揮ひなんと致せしを引捉へて据置き候所に其者執ねく飽迄逭れんと搆へて怪しき詭計(はかりごと)狂人ならば人柱免かるべきかと思ひしより遽に佯る狂氣の振舞折柄參り合せし松王種々に三郎をすかし狂人にては叶ふまじ早う逃しやれと勸むる程に三郎の心

動きぬと見にて放ちやらんとする狀態某前程より物蔭に藏れ居て其者の樣子を窺ふに眞に狂人の態度に非ず且や許さるべき景色見てとるより嬉さを包み兼たる泣き聲扨は此者巧みたり狂氣をよそはふて逃れん謀策やはか見損じ候べき遂に其座に於て白狀に及ばせ三郎に護固くと戒め置き立歸つたる其迄は某正しく面前に見て候ひし豫て申しゝ時刻違へず此夜明乘物を以て某迄三郎付添送參りし四人一間の裡に擔入れし上引明くれば繩をまとひし松王が出で參らんとは思ひがけ申すべきや三郎こはそも如何にと問へば

浄海　其三郎を是へ呼び來れ

盛國　御掟にては候得共三郎餘の愕にや今朝其折より以の外の違例

浄海　一人往て見て參れ(侍一人退場)何と申せし其三郎は

盛國　三郎が申立候には其夜松王身上の祝有る由を申し三郎を始め關の者共に飽迄酒を勸めて醉倒ふし人靜まるを待て眞夜中頃庭所

々に焚きたる篝火を消し秘に堂に籠置きたる四人を盜出して放遣り己代て其儘捕はれし者の態に佯はり燈を消したれば樹蔭月の小暗きに松王代て有らんとは思ひ寄るべきに非ざれば其儘輿に乘せて是迄は參りしとか事態餘に不審しくは候へども關の者共を集め糺すに申す處皆差はず此上は松王を御詮義有らん外はなくと存じ乃ちあれに召連て御座ります

浄海　是へ出せ

盛國退場

こは心得難き松王が振舞

重衡　定て深き子細有る事で御座りませう

浄海　如何なる子細か有得べき

盛國松王を牽て再登場松王下手に平伏す

松王狂氣を致せしよな

松王　恐ながら松王狂氣は仕らず

浄海　確と左樣か如何にも其面魂狂氣致せし者にあらずさあらば先問はん此程申し受けたる使如何やうに仕了せたるぞ復命の趣先其より聽かむ

松王　ハヽ

浄海　サ如何に〳〵

松王　昔く諸國を御索あるもあれに肖たる女性は最早御座りませぬ

浄海　怪我はしさすなと申付しに其方の手を以て殺したるか

松王　如何にも殺害致して御座りまする

浄海　奇怪なり开は何故

松王　哀れ其者が某に申しヽ言葉には平家を恨むが罪ならは天下の人誰か罪なからんに爭で一人を責められん公を罵たるが科ならば公の御咎有るべき定なるに私かに連行かれんとする事私かに恨みられたる恨をば報はんずる下心と覺にたり是れにも知るべき平家の無道其下に立つ爾輩人間にてはよも有らじ現在の主を無道梟惡と罵しられながら道理なれは返すべき詞はなからうがと耐に忍ぶは松王が主命故とは知らずして無禮を極めし女の振舞もはや勘忍相成らず刺殺して候ひき但し其者の申しヽ雜言唯今御前を憚ながら少く眞似出したるには止らず松王其者を生害致せしは止むを得ざるが故なるを篤と御合點有られんとならば其が申しヽ恐しき言語を逐一眞似て言上仕るべきや

浄海　默　紅の色失せし死人に言語なし松王が舌を以て其死たる者の我らを罵りの詞聽たうない其者罪有て殺せしと言はヽいふべしさりながら捕へ來れとこそ吩咐たれ殺せとは言はず僭越の沙汰罪是一又未だ公の罪名に及ざる者を殺せしは罪科なき者を害せしと異ならず罪是二左程の者をむざと松王が手にかけしは殘念至極とはいへ死たる者再び復らず是は後日の詮義有るべしよしそれは其是や松王其方今何故に我が前には在るぞ生田の關に於て大事の召人を盜で放ち遣たるは天が下に恐懼を知らぬ擧動是

何の所存なるぞ

松王　言葉多きは恐わり御使を受ながら勤を仕ふはせざりし過失如何で其儘立ち歸らんに面目や候べき山谷に跡を隱して不忠の臣たらんよりは幾年月の御鴻恩の萬分に應へ奉らんせめても御奉公今度築島御造營に就て人柱の者御召あるこそ天の松王に授け賜ふ所年頃より御情にかけられ召給ふ詮には此命人柱の御役に立て下さらん事あはれ松王が切なる御願御聽入れ下さらば數ならぬ身の本懷至極に存じ奉ります

淨海　年頃聊か目に懸て遣しゝを心にしめたる志神妙に存ずる其に就て三郎が身の勤を怠り大事の囚人を盗まるるを知らざりし過失は愈逭るべからずして松王何故明らさまにしか願ひは出ずして故に此入道を驚かせしぞ召人を盗み放たるは後暗らき所業とや言はん

松王　罪有る身に較ては科なき旅人の歎き見るに忍はれず畜生なれども

罪なくして死地に就くには闇愚の君もあはれと思し羊を許されし例もあるをや

淨海　事似たりと雖も筋同からず羊は律を以て擇ばれしに非ざれば牛を以ても替ふべし且つや其は惠王が姑息の仁牛の歩むに代へよとは未來を眼前に視る目なき愚夫凡人又孟軻が當座の詭辨牛が子舐る親心家以て睦かるべし以て家を治む可からざるを知らず以て家を治むべし以て國を治むるに足らざるを知らぬ僻言旅人の嘆を以て放ち遣たりとは何事

松王　(旁白此場に於て割腹致さは其申譯立つ可きなり命を損つる途二つ尚未だ斯る岐に迷ふか情なき仰死を爭ふを戰場には功名とかいふいざ爭はんいざ去らば爭はんいざ現世(うつしよ)の權勢と爭はん

淨海　生命を惜むは凡夫の常歎くを以て許す可きかは民の歎を知て天は災害を奈何で下すべき

松王　此場を去らず割腹なすべき此命上るべきは一つ

盛國　恐ながら彼逃たる者を再び召取らん事大海を網に探るとも等くよ
し又捕へ得べくも明日明後日には如何
淨海　兎角申すな松王が願の人柱はやとく許したり許す
退場
重衡　松王海に沈むが願ひか
松王　此に生れて此に死す人間の一生は地上に起き上て眼を瞠たる間
のみもとより跡に殘すべき心もなき身ひとつ
業盛　とはいひながら
經俊　此世の名殘恐しき最後
盛國　惜まれぬ可き命なるに
侍一人登場
侍　松王殿を一間に入れよと我君の仰
松王侍に導れ次て盛國及侍退場
重衡　あら痛はしの武夫やな

一同目送る模樣よろしく有て此道具廻るか若は幕

第五段

第一場　生田の森の場

本舞臺に一面の平舞臺にて上手より下手に懸け一面の森林
杉榎橡銀杏など枝を組み葉を交へて木立物古り平舞臺には
尾花野菊亂たる邊に落葉を散らし梢の隙處々に星明を見せ
都て生田の森深林夜景の躰なり草葉の中に樫の實のはらゝ
ゝと散る音に連れて男裝の橘登場
橘　未だ耳にある懸金の胸を刺す矢の風切る響別れを惜しと劍刃の
身を斬る思ひ戀人さらばとは御情かは知らねども冷たい冷たい
冷たい心其心が此胸に染みわたるか體内の血は氷のやうに冷る
ずや逃して貰うて此苦み迚も助ける御慈悲なら何故に此苦を救
けては給らぬか逃げん逃げよ行かう來いとは言はれぬず連れて
逃げて給らぬずや見初めし怨廻り逢うた怨嬉いと思ふは我から

の心の詐身を恨みても此身軀は消にもせず解けもせぬは何故世にある限ならずともせめて一日二日三日何時か心を見せざるべき報いたき願ありながら情を被いで出る後に脱棄置きし仇濡衣着よとて人に殘せしは心が鬼か淺ましや思へば行くにも前は蹈れず喃松王様迚も命は助かり給はぬ父上親子の縁は是迄も薄かりし此世の契今迄の身に知らるゝ風の前の燈ならばあれあの風の音も心許ないもう苦の下此世には居給はぬ其時には其方に科をかけては親にも濟まぬ戀しい戀しい其父上が替り果たる御姿を見る様な事に成たなら斯のやうな目に遇はさうとて逃し給ひし御心情とは申すまい慘いといふも恐しや殘る御身は何となさるゝ殘された此身は何となる事ぞ三千世界のなぶりもの此身ばかりか其方をさせうや思へば是迄落來しは魑魅魍魎の穿此の暗き闇の中に魔の誘ふ手を探りしぞや父上様嘸冷たからう願ふは佛の御導きはやく此身を今來し道へ

庄司の幽霊登場

あれは父上

幽霊

橘我兒かあら戀しや

橘

もう世にないか喃消えては給るな此手を引て

幽霊橘退場

千鳥

奥にてコーンと狐に擬て叫ぶ聲あり千島登場

狐は夜も眠らずに露を舐めて森を彷徨くあれ彼處に見る殿造りは庄司様の御館大方待て御座るであらう一つの魂は彼處へ往て内の様子を誰も人は居らぬか一寸塀を越て覗いてきや何足がすくむそんなら斯々して歩て行きやいエイ此薄が邪魔をする此薄がオヽ是庄司様此は人が覗かぬやうに結うてある垣儂と其方が手を引て歩くのを人が見ぬ爲の垣あれ誰やらが覗きます垣を覗くは誰々々オヽ厭らしや血の付た人が恐しやコーン歸たかオヽ歸たそうないヽえ又足音が寄るは來るは平家の軍兵鐘の音太鼓

の音オヽ早う夜が明けよ狐は巣に歸るコーン

退場

第二場　福原御所大廣間の場

本舞臺は一面の平舞臺にて正面に上段を設け其後四枚の金襖には潑墨雲際の飛龍を描き上段の直上には高く簾を捲上げ綠色の總を飾り平舞臺上下は共に墨畫の波濤を腰に描たる銀襖を以てしきる下手には是に續たる渡殿の態にて上に簾を揭げ後に簾を懸下したり都て福原御所にある大廣間の壯觀爰に侍四五人列座にて幕明く

侍一　扨も目覺しき事で御座るな

侍二　目覺しきところでは御座らぬ無殘

侍三　淺ましき迄で御座る

侍四　何となく空も黃色に見えまする斯樣なる日は再度とは御座るまい

侍五　昨夜彼の厩の裏狐などの鳴く如き怪しき聲が致したは

侍三　某も聽きました又今期方未だ夜の明けぬ間遠き海原の沖に當て怪しき光を見付けたる者が有とか漁夫船子共が專ら噂

侍一　各ヽ未だ知召れぬか生田の森の邊に於て此頃夜な〳〵現はるヽ夜なき鳥のいづなつかひ或人の見たりと申すは髮は蓬を戴き若き女の死骸を小脇に抱き森の梢より颯と飛で下り薄の中に立つと見れば直に姿を隱すとか

侍二　何より以て怪しきは難波殿の行衛此程明月の夜池の大納言月見の御遊とて船にて明石迄も漕出其時某も御船の中に御伴申せしが其程怪しき女性の談各にも定めて御聽き扨其機より以來難波殿の姿ふつに見えず人の申さるヽは其女性必ず變化の者にして竊に難波を誘行て喫殺せしならんとの事後にて聽けば松王殿難波の行衛を索めんと須磨より陸に上りしとか變化の後を追ひし祟にて此度の成行き聽くも身の毛がよだつよ喃

宗盛經俊下手より登場

經俊　松王の姿を見られたるか

宗盛　オヽ忌々しきあの姿今宵の夢は何とあらうず

業盛下手より登場

業盛　小氣味の惡いあの打扮は

資盛成良下手より登場

資盛　あの青さめた顏を見たか

成良　此世からの幽靈で御座る

侍二人下手より登場

侍六　嗚呼何事の報いぞあれは

侍七　毒蛇の腹にとろけ死ぬるは

重衡及侍二人下手より登場

重衡　あら無殘人身を受ながら何の仕合

侍大勢續々登場して諸侍は皆それ〳〵に着座公達は立居て

互に見かはす

業盛　海の底はどんなに有らうぞ

經俊　月日の光到らねば常闇なる海の底青き光のさし添てあの松王が姿に映らば如何なる惡龍毒蛇と雖も畏懼をなして逃げ隱れん

資盛　去りとて潮水の中に人間が生を得べきにあらず胸に包みし鉛に沈まば

經俊　なびき茂れる沖津藻の中惡鬼の棲處に迷ひや入るべき苦き潮に咽返らば喉を張裂く苦み助け給へ南無阿彌陀佛

公達一同　南無阿彌陀佛

是にて着座廣間の中蕭然たり程なく正面の襖開きて入道淨海童二人を從へ猶其後には侍女大勢扈從にて登場襖は開たる儘にて後には金彩燦爛たる帳を垂下たり

淨海　是重衡松王が身を挺で死を願たる心は如何に

重衡　旅人の難義愁嘆見るに忍びず以て代らんとは殊勝の志

淨海　宗盛は何と

宗盛　人を殺せし報の程空恐しく

經俊　天より來るを待たずして自から報を取たるは天晴振舞

淨海　自ら報を取たるは定松王血氣の若人主命を爲了せざりし悔しさに深き思慮なくして身の成行に困せし上命をとかくと煩ひし時一念此に奮發して血氣の勇にはやる者から恐を顧ず四人を放ち遣て自暴の心をはるけ自から其に代りしは醉に乘じて熱き酒を被ふると同く物狂しき擧動にあらずや入道はよき家臣を喪ひたり

(旁白)是皆人間の妄執何ぞ獨りあはれなる松王にのみ咎むべき代々世々の人間の五體をめぐる熱血の渦まき返る潮流の中に立たる人柱是稀世の英傑が廻瀾の志誰か知らむ誰か知るべき唯目に見せん唯目に見るべき

松王白衣白袴下手より盛國觀如上人其他侍從僧等登場扈從の女三四俄に退場

如何に松王今そ最後の對面其方身を渡津海の底に投棄て天下末代の利益を爲さんずらん一期の思ひ出に何事をも許し遣るなり

重衡　罪有るを以ての咎とな思ひそ

淨海　否とよ〳〵我等に忠勤の志厚き者を科なくして斯る目見せんや身を捨てゝこそ浮む瀨はあれ海に沉てこそ罪も消ゆべし假令誰とさして擇び出すとも此入道が盃といふに誰か手に把らざる事はあらん唯松王が其身の過を償はんと身を挺出たる志の殊勝なるにめでゝ許したるぞ誰か有る松王に盃とらせ入道が願文此にあり御僧近く

童一人立て松王に盃を渡し僧都の法師淨海の願文を請取る。

間に松王盃を戴く事よろしく

又當來の勝果捨身末代の紀念必ず一山を建立し回向懈なかるべし松王此期に臨で言遺すべき事やある

是にて松王屹と面を擧れば後座の侍女二三人また退場

松王　如何なりし因縁にや十三年の御高恩世の善惡知らぬ童の程より斯く人と成たるは是偏に君の賜物冥加至極に存じます思へば此身此體軀を殺すは足らず松王には用なき地水火風の肉身御役に立つは難有や忝く存じまする又唯今の仰には是迄御内に侍ひしを縁に身後の御弔御心に懸け下さるとや下を憐み思召す其御志に對へ奉ては申さん詞更になし及びなき身の願なれども斯る御慈悲の心普く人の肺肝に徹らば此より後の世の中には面前主君に對し奉り唯今の松王が如くに心苦しき不忠の罪を犯さんずる者は再び御座るまい某罪科ある身として久敷御前を汚さん事心苦しう御座るによつてはや此儘の御暇

淨海　さな申しそ罪を犯すに到るべきを知て遣はしはせぬ本より自ら作りし過我等を怨むべき謂はれは有るまい

松王　情なくものたまふものかな怨み奉ると仰有るかさは我君の仰出づべき御詞とも覺え申さず怨といふ言葉の有る世には生存へ難き此身なりはや御暇賜はらむ

淨海　いや松王私の過は公の罪此期に及で入道が罪を許さぬとて怨み思ふな又生命助けぬとて歎く可からず

松王　あら心得ずや君に捧げし此命某此期に及で惜しむとか思召す人の心上には見えずされば こそ上には人の修飾いざ去らば松王が胸掻き裂て血に染つたる一片の赤心御目に懸け申さんか

淨海　愚よ松王我等に盡すの志など入道が知らざる可き身を殺して仁を爲す天晴天下に忠義の武夫助けたしと思はざらんや生きて勝平の世に目に見にぬ奉公せんより死して餘榮あり萬人の目を一時に驚かさんには如かず最後にかつけむいざさらば往け

退場童一人銀造の太刀を請取て松王に渡す從列一同退場

松王　方々にもはや是迄此歳月の御恵御禮申上げまする此後の世の成行唯方々が御心の儘御一門の御繁昌藻をかついでも祈るで御座

らう

申さじ言はんの胸の裏潮となつて湧くならば消え行く泡は世の中の榮華の夢と御覽ぜよおさらば去らば

重衡　(旁白)嵐に散て後にこそ心を花と知る人あらめ

松王下手の渡殿に行懸る時突然後の簾を押分け妹尾三郎登場

三郎　御免御ゆるし松王殿情ない最後ぢや淺ましい最後ぢや是が別か情ないはい

松王　別を惜で給はるか忝ないや是歎き給ふな此某は嬉くて死ぬるなり海の底に藏すべき寶有る故に

三郎別を惜む模樣よろしく

宗盛　(旁白)是松王幽靈に成て出まいぞや

にて道具廻るか若は幕

第三場　兵庫の濱の場

本舞臺は一面の平舞臺にて平舞臺の前側一通は浪幕を張て後は砂地にて海の方より陸に對したる趣に拵へ正面奥深に木立を隔てゝ船見濱浦の御所を望む書割舞臺は濱邊の躰にて後には立木疎らに有て上手より下手に掛け竹矢來を設け一切兵庫の濱邊人柱儀式の場の躰なり

此に少し下手に松王白衣白袴白馬に白鞍を置たるに乘て立ち遙か上手には成良盛國床几を据て腰を懸け其後には諸侍役人若座矢來の後には見物多人數舞臺中央には叡山觀如上人及び扈從の僧三四人都て濱邊の砂地に有黑幕を切落せば觀如上人今しも讀經を畢りたる躰にて入道の願文を捧げ

少僧都　(讀上ぐ)弟子入道淨海敬白夫れ以るに懇祈の到る所響應必ず遠はず從前の諸願靈驗常に新なり弟子本より因緣ありて前鑒揭焉既に當來に賴有る者乎伏て惟に弟子帝業の繁昌に志し寤寐忘る可からず兆民の福利を思て昕夕に心を碎く竊に諸佛天神の冥護を

期し廻施嘗て絶にず愈欽仰に向ふ抑嚴重祈請の筵天衆影向の處に於て聊訴申事有弟子退て思ふに當年土壤を興し蒼海の一隅を治めしは洵に是百代行旅の利益を鑒み萬世柁檣波濤の禍を攘はんが爲なり然處一朝の暴風是恐は龍王の嗔を爲す者歟濁浪湍渤して砥柱震蕩俄然崩墮する事既に一再に及びぬ何ぞ夫れ然るや當今朝廷正道是蹈み從來弟子功德是積む固より是勝果有る可きの善業をや倩ら思ふに月は雨に遭て影を藏すと雖も光を朦朧の際に現し花は風に散て色を滅すと雖も香を薫發の袖に止む眼前の變幻深く惟しむに足らず物表の眞實偏に賴むに耐へたり龍神奚ぞ棄てんや天衆遂に祐けざらんや半歳の民業は以て千載の王威を輝す可し乃ち更に築營を謀りぬ根基磐石長に鯨波を凌がんが爲石を積疊むに先て人身を海底に沈め謹て海龍王に献ず夫れ代は澆季に及び時は末法に屬す一人御政何ぞ天心に背く事有らむ萬民の所爲に到ては定めて過を犯す者あらん此萬衆の過を渝

へんが爲に蒼生の一人を送り且石刻の經を奉納し海底に安置せん即ち此供養を以て願くは將來の災害を斷絶たん此に三界の諸天を驚奉る事偏に此儀に由り四海の龍王を聚めて遍に其嗔を遏めしむ此言必ず上天の聞に達し自此下土永く勝地の利を享けん鎭護直に來るに於ては成算遠からず成就すべし今日の願旨如斯敬白太政大臣正一位大禪定入道淨海敬白

願文高らかに讀畢て徐々と歩みて上手にすまふ事宜しく有

松王　（旁白）蒼生の一人を以て萬人の過を渝へんとな松王が此身を以て代るべくばあはれ願くは天が下に一人も殘す事なく其過に代るべきなり左もあらばあれ過なき人には誰か代はりしぞ今ぞ知る松王は此身を以て天下の過には代るなり怨も消えぬわら本懷

奥の方騷然正面後の矢來を潛て橋登場

橋　（旁白）見よや是こそ其方の戀人

嬉しや世をば隔てざりしよ懷かしや松王樣此御姿は淺ましい何

事が淺ましい此身の過免して給はれ神佛戀に亂れし心から言はるゝ儘に逃げたのは御言葉を聽き過ぎた御身に咎知りながら捨て行しは禽獸にもない心宥して給はれ松王樣是つれない悲しい今は此世の親にも別れし憂き身の果の置所海の底より外になし是喃死んでは下さるな此身が死ぬべき定て有たればこそ捉はれもしたものをもう此儘で死まする跡に殘つて下さりませ何の心も盡せぬ此身に他生の緣とはいひながら生命に代つて給るとは勿躰ない御情勿躰なや身に餘る御情何に包まん此嬉しさ死出の山路を行々も思ひ出しては泣きませう(鞍壺に縋てかい口說く)

松王　(旁白)影向ありし諸天の神此人を憐み給へ

一　これ御身の眞心は世を隔つとも忘れは致さぬ嗚呼無殘間に合ひかねしかもはや事々かく定りし上は御心忘れは致さぬ今は早く此塲を捨何處にも身を隱して給べ願ひ願ひ嗚呼願ひぢや是早く此塲を去られよこれ旅人

終りの一句にて語調變じ態と聲高くいひ放つ

橘　隔給ふかあら恨めしや

松王　御身の爲に殺す此身にはあらず恨となる思ひ給ひそ警護の面々盛國殿此人に過なきやうに此塲を去らして給はる可し松王最後の御賴み

盛國　心得つ如何に疇昔の旅人松王殿の難義に代らんとなアイヤ後れたり遲かりしぞよ御顧嚴重の筵妨げんは恐なり罪なり疾く立退召され

橘　今は是迄松王樣父上逢はう

懷劍を拔き自から胸を貫く

喃我戀人死ぬるは嬉しき賴あり(仆る)

盛國　靈塲に血を

成良　汚したるよな

松王　南無阿彌陀佛　進め我馬(海に乘入る)

盛國　（旁白）こは是正しく女性なるに――ムヽ尋ね來りし志に愛てヽ此屍體盛國が隱し得させむ

上衣を脱てか若くは袖を切て橘を掩ふ折柄奥の方騷然騷然

正面の矢來を潛て千鳥登場

侍　すは狼藉狂人々々

千鳥　極惡の平家共は此に集て何事をするそ那須野が原に年經たる狐コーンコーン人間の手には合はぬぞや恨めしの平家一門今に見よ取殺さん狐をつけて取

見物喧擾

殺さんこれ押て何する心オヽ女君に逢はさうとかエ惡人の平家が連て往たものを地を探しても天を

舞臺の床に仕掛有て松王次第に海に乘入水波腰の邊を浸すに至りし時手の屆く邊の水面に金箋ひらひらと虚空より舞ひ墮つ盛國太刀を拔て千鳥が天をといひさして空を仰ぐ時に刺す

あれ鶴が鶴が（仆る）

雙鶴舞臺の上を高く飛び過ぐる仕掛有

松王　（金箋を讀む）人の世のつらきためしを見し田鶴は古巢や如何に戀しかるらむこは是小松の大臣　難有や正等正覺

松王空を仰げば一時に深處に落込む仕掛にて波幕の中に頭を沒す但金箋を懷に入て合掌するか海に捨て合掌するか或は握みたる儘にて合掌するか仕方は猶樣々あるへし少僧都並に從僧珠數を採て合掌盛國太刀を投棄て合掌

一同　南無阿彌陀佛

を唱へて幕

藤野潔の傳

明治四年八月八日。伊豫國浮穴郡久萬町に生る。通稱を久萬夫といふ。父は漸、母は十重(大原氏)、藤野氏は世々松山の藩士なり。治農掛を以て一家久萬町に在る時生る。生れて一月ならず一家松山に歸る。

同十年(六歳) 一家讃岐國高松に移る。

同十一年(七歳) 母を喪ふ。幾何ならずして一家松山に歸る。

同十三年(九歳) 一家東京に移る。

同十六年(十二歳) 赤阪丹後町の須田塾に入る。後小石川の同人社少年塾に入る

同二十年(十六歳) 夏期休暇中鄉里松山に遊ぶ。

同二十一年(十七歳) 夏期休暇中向島に居る。富士山に登る。後横濱に寓すること少時。商業に志あり。

同二十二年(十八歳) 秋の初神經病に罹り。巢鴨病院に入る。病稍愈ゆ。十二月松山に遊び病を養ふ。

同二十三年(十九歳) 自ら古白と號す。後湖泊堂壺伯等の字を書すること あり。

同二十四年(二十歳) 四月東京に歸る。秋俳句大に進む。

同二十五年(二十一歳) 東京專門學校に入り文學を修む。獨り南豐島郡戸塚村高田馬場の跡に寓居す。十二月一家松山に歸る。留まつて學ぶ。

同二十六年(二十二歳) 夏期休暇中松山に歸る。上京途次尾張國知多郡洞雲院を訪ふ。僧に請ふて髮を削り。如意を携へて上京す。

同二十七年(二十三歳) 春小說「椿說舟底枕」を草す。夏期休暇に先たつて松山に歸る。蓋し卒業論文として審美論を草せんとすれども論據を捕へ得ず。鄉里に歸りて志を果さんと欲するなり。終に論文を得ず。脚本「築島由來」の稿を携へて上京す。十一月松山を

發し途に周防國大野に無得を訪ふ。

同二十八年(二十四歳)「築島由來」を早稲田文學に載す。四月七日帝國大學第一醫院に入院し同月十二日に歿す。骨を松山正安寺の母の墓の側に葬る。

○

古白の母は余の叔母にして、古白は余よりも四歳若き從弟なり。古白幼少より他郷に流寓せしかば余は幼時の古白を知らず。只僅に知る所は七八歳の時彼が高松より松山に歸りて自家の花園に思ふ存分の惡戯をなしつゝ遊び居たりし有樣のみ。生れてより神經過敏に局度狹隘なりしかば戸外に在りて衆と遊ぶことを厭ひ家に在りて遠慮無き友と遊ぶことを喜ぶ。彼が遊ぶべき廣き美しき庭園を持ち其庭園の中に自ら王となりて他より制限せられずに惡戯を爲すの權を持ちたりしことは、内氣なる貧しき余をして如何に其境遇を羨ましめしか。其惡戯至らざるなく、余等を眼中に置かずして傍若無人に立ち振るまへるを見て、余は暗に畏敬の念を生じ、彼を豪氣の人なりと思へり。未だ郷里一里四方の内に屈まりし余は、彼が羈旅より歸りて高松なまりを使ふを聞くさへ、猶ゆかしくえらきものに思へり。後ちある時古白は余の家に來りて、余が最愛のせんつぱ函庭の類に植ゑありし梅の子苗を盡く引き拔きし時は、怒りに堪へかねて彼を打ちぬ。母は余を叱りたまひぬ。これより余は再び古白に近づくことを好まざりき。古白が破壞的の性質は、到底余と相容れざるを知りたるなり

程無く古白は東京に移りぬ。明治十六年余が上京して赤阪に在りし時塾舍を同じうせり。此時古白は他の塾生と喧嘩すること絶えず。先生は屢彼を譴責し且つ余に彼を誡めよと命ず。居る數月余は退塾して神田の藤野氏に寄寓す。古白亦同人社に入る。其同人社に在るやナイフもて同學生を傷けたりとて塾の監督より暫時歸宅を命ぜられ、余は同人社迄彼を連れに行きたることあり。其惡戯は此の如く甚だしかりしも毫も惡意ありしにあらずして寧ろ無邪氣なりしなり。只褊狹なる性質は人と親むこと能

はず。却つてなべての人を恐るゝの結果、喧譁などを起すに至る。其喧譁といふは口もて言ひ爭ふ抔いふことは無くて直ちに腕力に訴ふる者。しかも腕力は寧ろ弱くして他を壓するに足らぬこと多かれど、胸中の熱氣は勢盛んにして外面に爆發せんとするを以て勝敗を顧るに及ばざりしならん。されど負くることは徹頭徹尾嫌ひの性なれば迚も腕力にて敵し得られずと思ふ場合には刄物をさへ取ることもありけん。されば古白は毫も他を害せんとの意にはあらず、又自己の本心に訴へても耻づる所なかりしなるべし。彼は刄物を取ることを正當防禦と認めたるなり。何となればば彼が恐怖心を發したる時は總ての人を敵とし皆己を害せんとする者の如く思へばなり。

此の如く狹き度量なりしかば人と交際する能はず。たゞ〳〵に友の訪ふ者あるも主人となりて之をあひしらふこと出來難く、若し友二人同時に來るあれば彼は之と對坐することさへ得せず席を避くるに至る。是れ惡戲時代過ぎて將に鬱結時代に入らんとするの間なり。

明治二十一年の頃より智識も感情も著く發達せしかども意思は少しも發達せず。最早惡戲の爲すに足らざるを知り、更に大なる架空的の希望をも生じながら、之を實行せんとする勇氣は無かりき。感情の發達は直ちに熱火の如く愛情を喚び起せりとはいへども、其熱氣は之を放散する能はざりき。是に於てか彼は沈鬱に陷りぬ。今迄多言なりしもの今は口をつぐんで全く默せり。

古白曾て謂へらく我が願ふ所は野蠻國に入りて王たるに在りと。其少時(明治十八九年頃か)の小說「愉々快々濟民奇談」は其希望の幻影として見るべし。こは惡戲時代の空想にして希望とは言ふべからざるも、此頃に至り其空想は多少の變形によりて希望と爲らんとする者の如し。彼は南洋旅行といふことを企てんとしたり。何故に旅行するかと問へば只旅行する許りなりといふ。何の益かあると問へば見聞の博きことを欲するなりといふ。而して其心の底には猶惡戲時代の空想の俤をも少しは留めたるならん。且つは敵多く障礙多き今の境涯に在らんよりは敵無き障礙無き野

蠻國に行きて思ふ存分に我儘言はんとの心なりしならん。(彼か特に南洋といふは野蠻國といふことを意味す)然れともこは第二の希望なり。第一の希望達せられなば即ち彼をして熱血を迸出するの地あらしめば必ずしも第二の希望を起さゞるへし。既に第一の實行的希望を達せずして。進んで第二の希望を企てんとすれば、其架空的にして行れざるを奈何せん。沈鬱はます〳〵沈鬱ならざるを得ず。

古白と共に向島に在るや余は注意を與へたり。曰く目的をしかと立てよ。目的立たらば飽く迄其目的に向つて進め。今にして一生の計を爲さずんば老いて悔あらんと。說くこと半なる頃。今迄うつむいて默つて居たる彼はほろ〳〵と涙をこぼしぬ。彼は泣き居る者の如し。余は叱りもせず命令もせず、只愉快に話し居たるなり。されとも古白は泣き出だせり。其意殆と解すべからず。此解すべからざる者は始より古白の腦中に存在し、死に至る迄終に誰にも解せられさりしなり。

二十二年夏余は歸省して九月再び上京す。着京後直に古白を麻布に訪ふ靴を脫ぎて玄關に上らんとする時、古白の後の母なる人出で來りて余に古白の病狀をさゝやきぬ。驚きて古白の病牀に近つけば余を見て大哲學者來れりと大呼す。而して自ら許すに大美術家を以てす。喃々喋々口を絕たず。後數日相共に携へて向島百花園に遊ぶ。彼は道路逢ふ所の者に就きて一々に之を評す。曰く彼男は我を見て笑へり。曰く彼子供は我に向つて怒るなり。曰く彼犬も亦我を睨むか。彼は總ての物を以て自己に好意若しくは惡意を持つ者と思へり。古白の余が寓に來る時、たま〳〵一羽の鷄は椽に上り猶疊にも上らんとするあり。古白曰く雞も亦哲學を好むかと。それより數日の後彼は空華幻影を捉へんとするが如く頻りに煩悶して置かず。病院に入りて後は再び沈默して復一語を放たず。

病を故山に養ふこと一年餘、諧謔日を送る。二十四年歸京するや精神稍沉靜、終に東京專門學校に入り文學を修むるに至る。此より彼は大文學者たらんと欲し、しかも其希望は遠からずして滿たさるゝことを期したり。今迄は雲煙過眼視したる總ての書籍に眼を曝し些細なる字句の批評をさ

へ爲す。沈欝時代は影を隱して今や光明赫耀たる希望時代は來りぬ

古白の神經質は極めて不規則なる發達を促して、彼は或る一點に老成し他の一點には全く幼稚なるが如きこと少からず、論理的の思想は終始發達せず、文學的の思想は蚤くより發達せり。彼は天然に文學思想を抱いて生れ出でたる者。其商業に志したるが如きは一時の事情に因て生じたる變態に過ぎずして終に文學に返れり。彼の文學は先づ俳句和歌を以て始まり、俳句は稍上達する處ありしも和歌は功を成さず。二十四年の秋、俳句句合數十句を作る。趣向も句法も新しく且つ趣味の深きこと當時に在りては破天荒ともいふべく余等儕輩を驚かせり。

今朝見れば淋しかりし夜の間の一葉かな

芭蕉破れて先住の發句秋の風

秋海棠朽木の露に咲きにけり

の如きは此時の句にして、此等の句はたしかに明治俳句界の啓明と目すべき者なり。年少の古白に凌駕せられたる余等はこゝに始めて夢の醒め

たるが如く漸く俳句の精神を窺ふを得たりき。俳句界是より進歩し初めたり。二十五年六年七年と漸次に古白の俳句も進みたるに拘らず、二十七年の頃より彼は却つて月並調を學びて些細の穿ちなどを好むに至り、其俳句は全く價値を失ひたり。一躍して俳句の堂に上りし古白は苦辛して俳句の堂を下りたり。其發達の不規則なること此の如し。

古白は幼より擧動あら〳〵しく從つて落付て事を爲す能はず。書物を見るも口のさきにて讀み、字を書くにも極めて拙き文字を連ね、文章を綴るにも間に合せの書きはなしに過ぎざりしなり。一旦文學と志を立てゝ後は古書を讀むに一字一句をゆるかせにせず、手習に耽りて殊に繩頭の細字を書くことに巧に復前日の拙字に非ず、一句一文を綴るにも些末の假名遣にさへ注意して推敲に心を碎きたり。曾て小說を書くに初の一行を書き改むること二十度に及びたりといふ。一字一句に注意したる古白は却つて大体の上に注意せざりし傾向を現したりとは言へ古白の前途は實に望を屬すべき者ありたり。

二十七年卒業論文に頭腦を惱まして鄕里に歸りし後、脚本「築島由來」を草す。一句綴りては氣に入らずとて書き直し、一枚書きては又氣に入らずとて引き破り推敲又推敲、稿を改むること三度にして遂に完成す。實に古白一代の大作なり、古白の文を草するに當りては推敲此の如く其脫稿した る後は滿心の得意自ら已に大文學者と爲りたるが如く思惟す。而して傍人より見れば其文章は全体の上に大缺點あるのみならず、字句の間亦瑕瑾少からず。彼の推敲せしは或る一點に止まりて他の點は毫も之を顧ざりしに似たり。「築島由來」を携へて上京するや彼は以爲く大文學者の名これによりて博し得べく數百圓の金これによりて攫し得べしと。此時彼の希望は頂點に達したり。然れども事實は空想と違ひ社會は之を歡迎せざりしのみならず之を評する者も少かりき。彼は全く失望せり慢心の强きに拘らず世評に無頓着なる能はざる彼は全く失望せり。今や希望時代も過ぎ去りて劍を持ち銃を携へたる絕望時代は黑幕の中より現れ來らんとす。

古白の人に接するや快活にして物に拘らざるが如く、其相話するや奇想天來諧謔百出人をして笑はしめ驚かしむ。誰に交るにも城府を設けず親疎愛憎なしと見ゆるものは彼が一人の親友を持たざりし所以なり。彼は何人に向つても自己の秘密をさらけ出して同情を求めんには餘り卑怯に且つ餘りに人を疑ふに過ぎたり。無邪氣なる古白は必ずしも人に憎まれずして或は親しく交らんとする人あるも古白は之に應ずる能はざりき古白は終始孤立せり。

古白の身を譬ばゝ火燄を包みたる氷の如し。氷に觸るゝ者誰か中に火燄の燃えつゝあるを知らん。火燄は熱情なり。火燄を包みたる氷は熱情を隱さんとする平和の容貌なり。古白の常に笑談するを見て人は古白を平和なりといふ。胸中の火燄は未だ曾て消滅せしことあらざるなり。絕望後の古白は幾何の苦痛を感じたりけん、されど笑顏も戲談も全く平和を裝ひたり。外部の平和は內部の熱情を冷却する者に非ずして却つて其勢を增す。火焰は終に古白を燒き了りぬ。吁。

死に臨みたる古白は猶平和を裝ひたり。其遺書の中に曰く

(略)彼の所謂厭世哲學家の如く人間の活動を貶して是界は厭ふ可きものなりとの執見を抱くにはあらずして然も生の徒らに予には悒快を增さしむる开を如何にといふに是界が予には緣遠く世事か予を活動せしめ若くは反動せしむ可き制限を予に與へずなりたる即ち予が生存といふ事にインテレストを抱かずなりたるなり是予が從來の行爲經歷の疊積したる結果にして固より一朝の故を以て自ら求めて遽に此に至れるには非ずされば余が把持する所の理想若くは希望の實際と劃〇する等頓挫轉倒を物うき事に思ひたる失意が(略)原因なるにはあらず然も世界が予の嘗て抱きし所の理想及び希望の如くにありたらんには予は夢にも自暴の想をば爲さゝりしなるべしかくいふ時は常識は或は予を目して詭言をなす者とやせん予は必ずしも現想若くは希望の實世界の風潮の爲に沮挌されたる事を苦しんでの故に(略)あらざる次第は此に予が理想若くは希望を述ぶる事によりて自然較明な

るべしそも〳〵國の富の爲には家の貨財の幾分は之を公に納れざる可からざると一般絕對といふものゝ完全ならんが爲めには個人に於ては多少の欽漏なきを免れず水に映れる爲めに月は光を損すといふに非ず然も人智は際涯ありよし人智は限なくとも春の草を何故に青きぞと穿鑿をせんは之を疑問狂といふべく之を哲學家なりとは云はぬなり(略)

因果は徐ゆ可からず是界は適種生存なり厄羸なる腦髓に懶惰性を載て是界に生れ出たる予幼稚なりし程は知らず十歲を超て祖翁の膝下に學庸の句讀を授けられし時常に卷に向て泣かざる事なかりしは今も記臆す其時讀書を嫌しは斯の如くなるも書は讀む可きものなりとの觀念は嘗失はず(略)其後故山の休養一年餘にして再び都門に出て狂餘の廢人を以て文學を修む可き學校に入り此に在學約三年の間は從前の行狀に比すれば稍勤勉なりきと謂ふべし卒業試驗に用意せん爲めにいかで審美學の創說を作らばやと思立てより數月に數度の稿を

作りし中に注意を一點に凝らすの精神力を失ひ腦髄の痛疼と胃病とを興し治療の爲儿邊の稿本を引破て故郷に歸りしか二月許する間に自から力なきを歎して(略)此念押にかたく且つ如斯は予か毫も意を働かす一事をせさりしの果(略)なりと思得たれば活動せんことを目的にてまた故郷を出つ二月許りは此念を忘れ居るを得たりしが今は遂に耐えがたきなり顧て思ふに予か精神昂沈不定にして意向をして恒に一事一物に專らにせしむる能はす勇猛進取の氣力は例として一時の發作たるに止りて持久するを得す傲慢にして他に愬ふる事を得爲さゝりしの果遂に愬ふる所なきに至りて玆に現世に生存のインテレストを喪ふに畢りぬ(略)行爲の迹に就て之を觀れば大勇なるものあるに似たりと雖も心術に至りては洵に極めて怯なり心術と行爲との恒に矛盾したりし予が最後は嗚呼終に斯の如くならざるを得ざるか人間か外圍の刺戟に反抗し得るの力は際限有りて心を以て身を制しよく物質の羈絆を脫落し得んは予に於て遂に爲し難きなり(略)

明治二十八年三月十日　　羊年男生年二十五歳識

彼は自ら狂なりといふ、然り彼は狂なり。狂なれども狂人的なるを嫌ひて成るべく平和を裝はんとす。同じく是れ生存競爭に負けたるなりしかも彼は世を厭ふに非ずして世にインテレストを持たずなりたるなりといふ。彼は更に之を說明して希望の滿たされざりしがために非ず、しかも希望にして滿されなば或はインテレストを失ふに至らざりしならんといふ。此說明は矛盾せり。是れ其狂せるがためなり。併しながら其矛盾せるにも拘らず猶一貫せる自己の論旨は終始渝らざるを見る。何ぞ其眞面目なるや。意思强き人といへども死に臨んで文を書す多少の錯亂を免れず。況んや意思尤も弱き古文にして死を見る歸するが如く此眞面目の遺書を作り感情に訴へずして却つて秩序的の說明を試るに至りては、大勇に似たる者あり然れども古白には勇氣なきなり。勇氣なくして此の如く眞面目なる所以の者は終に解せられざるなり。是れ狂なり。

古白が世の中にインテレストを失ひし素因を先天的に存せし者ありと

も、之を促したる誘因凡四ヶ條あり。第一は前に論じたる文學上の失望是れなり。第二は生計を立て得ざりしとなり。明治二十八年三月六日附を以て某に與へし書中に曰く

（略）然るに小子才藝無く實世界に於て一方の位置を得るに難く然も猶心身を槁灰ならしめて幽谷に火食せざる人となる事を願はず老子のユートピヤ家の理想に非さるなり力食天地に愧づるなくんば五斗米に膝を折るもまた何かあらん然も小子性として手に算盤を把るに拙不才淺識また耕を以て衣服を獲るの道なし詮し來れは謫劣世に立つの能なきなり能なしと雖も彼の僥倖的を羨むを屑とせず復誰をか恨まんや（略）

と書し更に身を立つるに尤出來易き方法は英語を以て教員撿定試驗を通過するにあれどもそれさへ猶一年餘の準備を要すれば實行難き由を書し、更に水産業に志して一葉に棹し萬頃の茫然たるを凌がんかと思ふ由をも認め最後の一節に曰く

自分右縷陳するが如きの心情なるを以て先夜所承垂誨の如きは小子到底其任に非す身を立つる事能はず爭て家を立てんや已を利すること能はず奚ぞ他を利せんや

と。彼が性はうき〳〵として水に漾ふが如く到底規則的の職業に從事する能はず。水産業といふは比較的に彼に適せる者を擇びたり。されども開は快樂の點よりいふことにして過度の勞動は彼が耐ふる所に非ず。彼は終に一の職業に就きたることなかりき。

第三は家族に於ける配慮なり。幼にして母を喪ひ繼母に依る。同母妹一人異母弟二人異母妹二人あり。家庭の訓誡嚴にして過ぐれば假借せず。古白の尤も畏るゝ所は父君なりき。母方の叔父亦亡き母に代りて訓誡する所多し。古白此叔父君を畏る。しかも毫も之を嫌忌するの意はなきなり。藤野氏二家に分る。他の一家は海南翁（古白の實の伯父、義理の祖父なり）の家にして常に東京に住む。古白書中に「祖翁の膝下に學庸の句讀を授けられ」とあるは海南翁の事なり。

古白は道德上より論評を下して毫も惡と目すべき所行無し。普通の人必ず多少の惡を秘密の中に有す。古白に至りては秘密の惡なかるべしと信ず。若し少しにても惡行ありたらば其は意外の結果を生じたる者にして、古白の意思は公明正大天地に愧づるところなかるべし。蓋し古白は卑怯にして寸毫にても惡と認めたることを爲す能はざりしなり。此の如く無邪氣の古白なれば家族誰一人之を愛せぬは無く親戚朋友誰一人之を憎むは無かりき。されども古白は家族の調和に就きて配慮すること多く他の家族を見て精細の觀察を施すこと常なり。彼は其繼母に遺すの書を認めていふ。

（略）命の際に遺言書などは相認申間敷豫てよりの心算に御座候へども事情難已により思想の乱も如何なれども一書かきのこし申上候といふて扨何をさきに可申上歟永年の御恩愛などは迚も（略）申さる言葉には無之申すも愚痴がましき事は一切申度無之候扨申度は準滋など御教育の方にて候へども委曲は筆にまかせかね候唯一言申さてかなはぬ義は

嬾惰に日をおくる事の極めておそろしきものなる事を思ひしらしむる樣萬般の所爲に就而傍よりよく〳〵御注意此義くれ〳〵御願申上候しかし右は旦より晩迄始終几に向て讀書勉强致ずやうにとの意趣にては無之候人は各生れ得て格別の性質あるを角をためて牛をころすとかや唯空しく徒らに日をくらす事なく遊戯にても活潑に身心を動かして魔のさゝぬやうに仰而天に愧つるやうなる陰翳のさゝぬやうに被致候が肝要にて候嬾放なれは自然に魔がさすものにて候猶他の言葉にて申せば氣力を養ふといふ事に御座候兒女を嬾惰ならしめさらんやうにせんには家庭に憂鬱なる氣有之間敷候此所畢竟は和氣が第一にて候（略）今より十年程も相過候後家のうち極而樂しきやうに相成可申何事もそれ迄の間の御辛抱にて御座候得は日々可成陰氣な方の事は心の内に御とり入なく來日を望て喜望の方に一歩々々御近附なされ候半事くれ〳〵祈上申候私只今は精神くるひ一種の狂人に御座候へとも折々は眞面目の考も胸に浮ひこの書は誠にましめになりて

相認候しかし已は已を知らぬ者なれは狂人の句調有之可申歟自身に
ては判斷いたしかね候(略)生存し居て働かねはならぬとは折にふれ胸
にこたゑ候へとも妄念と知らぬにはあらすして(略)遂に思ひとまり難
く相成申候佛說ていふ前世之因緣なれは渴して飲を欲すると同理致
方なき儀に御座候何事も因果なれとも其因果に乘すれは何事も人間
の力のうち種をまけは生えるは即此理なれば五年十年先きの幸福今
から種を御まきなされ候御工夫第一たとへ一歩半足なりとも其方へ
向て御進みなされ候やう不斷御心に御懸なされ候半やう祈奉候今書
く筆の穗先をぬらす硯の水の乾かぬ間に私の命はなきものに可相成
存居候へとも如何なる因緣有之また意外の邊に命を繫き可申やらん
未來なればこれも相知不申事なからもしまた硯の水命よりわと迄も
かわかず有之候はゝこれも因緣なり誰か殺す者なるや誰か死ぬる人
なるやこれもくたらぬよまひ言自暴自棄はとの惡業はまたと有之間
敷とは萬々承知にてありながら(略)くるしからぬには候はねと一度癖
と相成たる一念遠離致すの氣力も無之候臨終の御願と申はくれ〳〵
も御氣落なきやう此儀はかりに御座候潔頓首

三月六日夜

母上さま

此書を讀む者誰か古白が家庭に對する愛情に同感せざる者あらん。彼は
初に二弟準滋とは二弟の名なり)の敎育を說き、次に同母妹に對しては世
間前を憚り機嫌を取りて增長せしむる事などはなきやうと賴み、終始和
氣の二字を骨子として死後の和樂を望みし彼の心中を思へば實に憫む
べきものありて存す。古白と最も親しかりし余は遺書を開いて此に至れ
ば眼をしばたゝかざることなし。
第四は熱情を外に發する能はざりしによる。熱情の最も著きは愛なり。此
間には多少の秘密もあるべしといへとも、其秘密の中に道德的惡意を含
まざることは古白の性質より考へても熱情の性質より考へても、保證し
得べし。彼は實に花柳社會に流連することなどは夢にも知らざりき。彼が
曾て長文の一書を認めて未だ親まざるの愛人に贈りしが如きは世俗の

少女に對して理想的の愛を得んとしたる者にして。其方便のつたなくやさしき處彼の愛の無邪氣なるを見るに足る、

彼は自らいふ、吾は狂を自覺するの狂なりと。狂と自覺する程の眞面目なる彼をして狂ならしめし者は此數箇の失望に因らずんばあらず。此中の一箇條にても彼の希望に副はしめば彼は猶浮世に對して全くインテレストを失ふには至らざりしなるべし。

余は明治廿八年三月三日(古白の死に先つ一ヶ月)を以て東都を發し軍に從はんとす。前夜古白は余の寓に來り余のために行李を理す。擧動快活なり。翌日手を新橋に分ちて余は廣島に赴く。廣嶋に居ること一ヶ月明日早旦を以て發せんといふ其前夜古白危篤の報あり。意外の凶報に驚きたりといへども、孤劍飄然去つて山海關の激戰を見んとする余の意氣込は未だ余をして泣かしむるに至らざりき。金州の舍營に在りて訃に接したる時も、只仕方無しと思ひたるのみ。戰は平和に歸し余は病を獲て還る。神戸病院に養ふこと二ヶ月、はかなき命を辛く取りとめて身は衰弱の極度に在る時、碧梧桐は余のために古白病中の狀況を詳に話しぬ。其後は傍に人無き折々古白の事を想ひ出だしては我身にくらべて泣きたる事あり。骨と皮とをのみ餘したる我身の猶涙の源盡きざるを怪みぬ。病やゝ癒にて鄕里に歸り始めて古白の墓に謁でしは同じ年の秋の初なり。惘然として イむこと少時。

我死なで汝生きもせで秋の風

後東都に歸りて復褥に臥す。さめ〳〵と雨ふる夜の淋しさに或は古白を思ふことあり。古白の上はわが上とのみ覺えて、古白は何處に我を待つらんといと心細し。古白手を拍つて余の怯を笑はん。

古白文學に志を立てし後は暗に余を以て競爭者となしたるが如く、余若し彼を壓することあれば彼はいたく失望し、余若し彼の俳句小說等を非難すれば彼は心中に余を恨めり。余の一簑一笠木曾を過ぎて歸鄕したるを見てさへ羨望の念を起し彼も亦菅笠を被りて旅行したる事ありき。されば余が從軍は彼をして余を嫉ましめしなるべく、彼は此時自已の境遇

を願て煩悶已む能はざりしならん。これも彼が世の中にインテレストを失ひし最近因なり。遺書の日附と當時彼が認めたる書狀とは之を證するに足る。彼は自ら文學者を以て任じ余等には劣らじと誇りながら、生存競爭に於て余に負けたるは古白の長く恨を抱く所ならん。されども余も永く勝を制する者ならじ。

古白の遺書に曰く

（略）願くは我の死後に拙劣なるわか文章筆蹟などを棄却し給へと。余が其遺稿を編むは彼の志にはあらざるべし。とはいへ殘さず棄却せよとは彼が幾分か文學者たるを欲するがためなり。余の之を集むる亦幾何か傳ふるに足るものあるを期したり。其草稿を取つて熟讀するに及んで歌俳小說盡く疵瑕多くして殘すに足らず。完全なるは十數首の俳句のみ。文章の如き間々奇語警句無きに非るも他の之に副はざるを如何せん。余の最負目より見るも文學者として傳ふるに足らざるなり。されど同學の人亦遺稿の出版を促す。乃ち之を刻して同好の士に頒たんとす。遺稿ありて傳なからんはさすがにて思ひ出すまゝに書いつけつ。

明治三十年三月一日　　病子規しるす

○

藤野古白は文人なり哲學者なり其人と爲りや能く嬉笑し能く憤悱し能く悵恨し能く覺悟す乙未の春忽然として逝く蓋厭世主義に徇すと云ふ余古白と久しく忘年の交を結ひ益を得ること少なからず一旦長別して追念己むことなし頃者其從兄正岡子規遺吟を集めて一卷となし視さる之を披閲すれは古白の音容宛として前に現す何ぞ今昔の情に堪へんや乃ち斯感を記し卷尾に付す若夫古白一生の文章の批評は子規以下諸才子在り老生復贅せず

丁酉三月　　老梅居主人鳴雪識

○

ほのかなる夕月影に夢ばかりなる花見えて枯れにし君が形見艸枯れぬとも よしや其の根は いや遠永く匂はん友垣のくちせぬかぎり此のくしき蔓草の花　　春の屋主人

○

君國にかへりましての八月こまゝ〳〵と一心安住のこゝろを文して知らせ越し給ひぬそが末に迷悟一處に湊會せば則如何唯それ自盡あるのみか死するといふ意志はまだ形骸に拘せらるゝが故に迷なるべきも死そのものは寂靜に契合するが故に悟なるべければとばかり筆をきりて出家は到底ゆるさるべくもあらず こよひまた人來てはやく身の上の目的をさだめよといふ健全なる腦力あらば九月には上京學校の試驗も受可申との返答も致候其人參りたるは結論の所まで此書かきかけの所なりし人情等の談にまた腦を攪亂し今しばらくは迷々筆を投じてふしどにころげこまんとす頓首と書きつゞけ給ひしも ふもへばいかばかりの涙なりけむ友戀しとて重ねて上り來たまひしあくる春には向島の櫻みをさめの最期をいそぎ給ふ君が末年の事どもはまこと夢のやうなりしにそれも二とせになりぬことしは季節少しおくれたればまだ浮世の花見ざたも聞こねねど降りうづむ落花が中に安らけく眠り給ふ面ざしみの

は目に覩るこゝちして、四月七日といふに、懷舊の心ばかりを君が遺稿のはしにしるす。

辱知　島村抱月

○

明治二十七年六月中旬、君病の爲に鄉里松山に歸養せられんとするや、同窓の學友別を惜みて、赤城社內なる清風亭に會し、丁度此の折、肺患を得て是れも鄉里に歸へらるゝ伴武雄君が送別の宴をもかね、聊かのもの整へて酒酌みかはせしことあり。酒酣なる頃、君立ちて一場の演說せられき。平常の滑稽とはいたく變りて、言々肺腑より出づるものゝ如く悲壯沈痛、余の如きは思はず君の顏を見詰めき。今は細なる所は忘れたれど、結尾の言葉は尙記憶す。其の意に「自分は下宿屋の部室に坐てゐて、地平線の遙かなたに白雲のたちのぼるを見て無量の感慨に胸うたるゝことがある。諸君と今別れて、再會することを期しては居ますが、奈何なるか分かりません、唯諸君は空のかなたに白雲を見たならば、彼處に自分がゐるのだと思つて下さい」云々、その後歸國の途中、京都より余に送られし歌に、

旅衣袖かへるなりさみだれの空ゆく雲ぞ峯にわかるゝ

と、君が心は常に空ゆく雲を追へるに似たり。曾て君曰はく、余は雲の千變萬化すると夢の變幻極まりなきとを寫し出さんと思ふ。文の妙は此の二つを充分に描破するを得て始めて極致の境に入るべしと。而して君が云へる所君が好むところと、何ぞ君自身の跡の相似たるの甚しき。

君が夭折は實に哀むべし。然れども銃と血とは時に人間の生涯を美化することあり。君が短生涯は今よりして之れを見れば、宛然一箇の長詩篇なり。蠢爾として老いて耻多きものに比すれば、寧ろ欽羨すべき也。

丁酉四月

○

古白の墓に詣づ

辱知　宙外しるす

上

正岡子規

何故汝は　世を捨てし。
浮世は汝を　捨てざるに、
我等は汝を　捨てざるに、
汝は我をず　見捨てにし。

浮世は汝に　負きしと、
汝一人こそ　思ひけめ、
汝に負きし　ことをゆめ
知らず浮世も　我も人。

浮世は廣し、　汝一人。
いづこのはてに　住みしとも、
あらゆる人も　我も世も
そを咎むべき、　誰一人。

億萬人を　容るゝべき
浮世は古白、　てふ汝が。
大文學者　てふ汝が
住むとはいかで　知り得べき。

自ら許す　文學者。
古白を人は　さは言はず。
人正しきか　あらず〳〵。
あらず、古白は　文學者。

汝は詩人と　生れ來て
詩人たらんと　せしが、且つ
途半ばにて　ためらひつ、
ひとり自ら　かへり見て。

塵の浮世を
買ひかぶりしよ。
浮世と知らず
さてや失望

汝が望みし
浮世が汝を
小詩人てふ
古白てふ名に

意地わるき世は
若き詩人を
汝は生れし
故に汝をず

汝はさは
價無き
頼みにき。
せり汝は。

如く。若し
知らばとて、
汝にして、
あらずかし。

望ある
妬むなり。
詩人なり。
妬むなる。

古白てふ名は
汝は浮世を
今や浮世は
小き汝の

知られずに、
捨て去りぬ。
唾し ぬ、
ふくつきに。

下

汝は何故
惜まるゝべき
自ら惜む
とて捨てにしか

身を捨てし。
身ならねば、
身ならねば
あら悲し。

捨てるべき身を
生きながらへし、

きのふ迄
何故に。

身を捨てんとは
思はざりけん

ある夜の夢に
人に逢ひけん。
何かたらひし、
うつゝやなごり

雲の上なる
塵の浮世に
いたづらなりき。
朧に見えし
此世に無しと

とにかくに
きのふ迄。

美しき
其人と
夢の跡。
雲五色。

あて人を
求めしは
月の夜半、
花の顔。
聞けば、など

此世慕はん。
月に住むとし
月にかけらん。

心定めし
やさしき人の
押しとゞめなば、
ながらへざらん。

身を捨てし後、
熱き涙の
誰こぼしなば、
捨てし身をこそ

あはれ彼
聞かば、吾
羽はなけど。

其刹那、
情ありて
世に斯くて、
うたて、あな。

汝がため
一雫
あぢきなく
喜ばめ。

あらいたましや。　天さかる

四國のはての　荒寺を

つひの住處と、　亡き骸を

母のそばにぞ　埋めける。

人も詣でず、　草生ひつ、

嘲る如き　秋の風

荒るゝが中に、　浮世如是

二尺の墳墓　只一つ。

つひに隱るゝ　母の袖、

浮世は汝を　捨つるとも、

汝は浮世を　捨つるとも、

汝を捨つべき、　母いかで。

○

香一捻君に花落ち雨寒し　鳴雪

花の春夕に死する可ならんか　五洲

思ひ出すは古白と申す春の人　漱石

君歸らず何處の花を見に往たか　同

追善や春の名殘を雨がふる　碧梧桐

花あれども君がためにと手向けざる　同

花散りて淋しきものを君に問はん　同

我に句なし昔思へば散る櫻　墨水

朧夜のそこ行くは君が姿かな　紅綠

君いますす線香燃ゆる花の中　肋骨

柳暗花明夢中の夢また醒めよ　霽月

花に南無君が菅簑槍笠　同

まぼろしに俤見にて櫻散る　叟柳

願はくは浄土の花の便りせよ　叟柳
物いはず〳〵して春の雨　南竹
花咲いて君まさぬかな〳〵　青里
櫻として梅として君は言葉なし　狸伴
已矣遺稿讀む日を櫻散る　梅屋
この春をかの春を君は浄土にて　同
花の中に俤見ゆる夕かな　半石
花清麗いまだ古白を夢に見ず　一宿
又しても櫻散る頃となりぬ　繞石
君が住む處にも花ありやなしや　四方太
我病んでうたゝ君を思ふ櫻かな　三川
極楽へ向いて日永の眠りかな　愚哉
春や昔古白といへる男あり　子規
空しく柳幽靈になるもいやさうな　虚子

飛び去りし・は蝶なりし虻の恨かな　同

古白の舊寓早稲田にありけるに

暮の春俤橋を通りけり　鳴雪

一週忌追善四句

十五人櫻手向けて涙かな　三鼠
花の頃此君逝いて一周忌　半石
君の日をこのやうに花咲きにけり　鶯洲
今年又花散る四月十二日　子規

三週忌追善三句

菅笠に櫻散りけり三年目　三鼠
櫻植ゑて二年花咲けど君さめず　碧玲瓏
古白死して二年櫻咲き吾病めり　子規

古白一週忌庭前の老櫻雨中の花正に好し

天も雨皆うつむいて花が咲く　虚子

私に思ふに古白未だ死せず
永き日を君あくびでもして居るか　同

○

五月雨をつくづくと吾君に遠し　霽月
君まさぬ五月雨頃の寒さかな　雀羅

百ケ日二句

五月雨の日こそ多きに水雞かな　碧梧桐
蓮咲いて百ケ日とはなりにけり　子規

古白遺稿終

明治三十年五月二十三日印刷
明治三十年五月二十八日發行

編輯兼發行者　愛媛縣士族　正岡常規　東京下谷區上根岸町八十二番地

印刷者　滋賀縣士族　熊田宜遜　東京神田區錦町三丁目二十五番地

印刷所　熊田活版所　東京神田區錦町三丁目二十五番地

非賣品